
UNKNOWN ~ 輪舞・巡り愛 ~

遊戯(Yuge)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNKNOWN 輪舞・巡り愛

【Nコード】

N5406I

【作者名】

遊戯 (Yuge)

【あらすじ】

心に決めた宿敵を捜し求める天涯孤独の流浪の旅人・颯太。そして、世にその名を馳せ、変装を得意とする忍び・小太郎。奇異な出会いを果たした二人は、それぞれの想いを胸に急速に惹かれ合っていく。やがて、乱世の過酷な運命が小太郎を襲う、その時颯太は…。

PROLOGUE (前書き)

この物語はフィクションです。

史実や実在した武将等は登場致しません。

以上をご了承承頂いた上で、お目通し願えれば幸いです。

PROLOGUE

草木も眠る深夜の森。

迫り来る緊張に虫さえが息を殺す。

激しく繰り返す浅く短い呼吸と微かな衣擦れの音を撒き散らして、一人の青年剣士が茂みを大きく飛び越え木々の間を駆け抜けた。やがて浪人風の男が、葉陰に漏れる月灯りの中、時折光る刀を手に同じ動作で駆け抜ける。

行く手を岩壁に阻まれた青年が刀の鯉口を切り、追い詰めた無精髭の浪人は、したり顔でニヤリと笑ってジリッと一歩踏み出した。

「おい、おっさん！ その男に手え出すな」

浪人の目の前に突然黒い影が降った。

「お前…、相変わらず忙しそうだな」

無造作な前髪が切れ長の目に掛かる若い男が、背後の青年に向けてそう言った、次の瞬間。

ピーーーーー！！

穏やかな森の眠りを引き裂いて、浪人がけたたましく呼び子笛を吹き鳴らした。

「うつるせーなあ…。何だ、この派手な奴」

男は片耳を塞ぐ仕草で訝しげな目を浪人に向ける。

「いいから早く行け！」

青年が前に出て刀を抜くと男は相変わらずの腕組みで鼻で笑った。

「ふっ、お前までうるせーよ…。あんたらも何時なんどきだと思ってんだあ」

二人は既に十人程の男達に囲まれていた。浪人、行商人、夜鳴き蕎麦屋…。身なりはまちまちだが、その手には各々大小の刃が握られている。

「ハッ！ 何だこいつら。下手な変装しやがって…、どこの端はしただよ。あー可笑しい、笑わせんな！」

「お前なあ…。」

ふざける男をたしなめる様に、青年が目を細めて冷たく睨みつけた。

「おおお。いい目だ…、ぞくぞくするう」

男は小さく身震いしてから青年に向けて腰を擦り寄せた。

「なあ、小太郎よお。俺さあ、お前なら一回ぐらい抱いてやってもいいぜ…」

「やめる！ 言つな、気色悪い！」

青年の端正な顔立ちにあからさまな不快感が表われた。

「小太郎？ 貴様…ひよつとして沢渡さわたりの小天狗小太郎か！」

浪人が目の色を変え、周りの者達もざわめく。
答えたのは、男の方だった。

「何だおっさん、知らねえで追つて来たのか？」

俺は？ 俺の事は知ってんだろ？

津留賀つるがの紅い疾風かせ日向颯太ひゅうがそうたってんだけど……」

「知らねえなあ」

「聞いた事ねえなあ」

浪人達が口々に言つて嘲り笑つた。

「ああつたまきた！」

颯太が勢いよく刀を抜いて小太郎に向ける。

「やつぱお前殺つてやる！ 今すぐ殺つてやる！ 何でお前みたいな男女おとこおんなの方が有名なんだよ！」

「何だと？ 誰が男女だ、ああ？ よおし上等だ！ 先にお前片付けてやる！」

「よっしや来おい！ 勝負っ！」

浪人達を差し置いて、二人は激しく刃を交え始めた。

それを囲んだままの浪人達は、呆気にとられ中には腕組みしてニヤつく者も居る。

「ふんっ。どちらか死ぬまでやれ…。こちらの手間が省けると言うものだ」

浪人達の誰かが呟いた、その時。

「甘いっ！」

小太郎と颯太が同時に向き直り浪人達に斬りかかった。油断しきっていた浪人達が慌てて刀を振るが、素早い二人の動きに一たまりもない。数名は転げる様に逃げて行った。

「俺の名前、覚えてるかな…」

颯太がニヤツと尻目に見ると、小太郎は刀を収めながら背を向け呆れた様に薄笑いを浮かべた。

「名が通っても仕事がしにくくなるだけだぞ…。会った事もねえ奴までが手の内お見通しだ。

颯太、お前に一つ借りだ。いずれ返す」

「ざけんな！ 俺は何も貸した覚えはねえぞ。お前を殺るのは俺だ…。それだけ肝に銘じとけ」

颯太は一瞬殺気立った目を向けたが、次の瞬間には小太郎の肩に腕を回し甘えた声を出した。

「なあ小太郎よお、女、紹介しろよお。いい女知ってんだろっがよお…」

「そんな暇は無い」

無愛想に腕を振り払う小太郎に颯太は尚も体を擦り寄せる。

「小太郎、そう生き急ぐなって…。」

命つてのはな神様仏様からの預かりもんだ。ところがその方々はえれえ気まぐれでなあ…。勝手に預けた命、ある日突然持ってちまう…。こつちの気持ちも事情もあつたもんじゃねえのさ……。

だあ、かあ、らあ、持ってかれる前に楽しんでけつて話したよあ…。で？ お前はどんな女が好みだ？ 俺あぼつたぼたの突き立ての餅みてえな女がいいなあ…。

へへへ」

颯太はよだれを拭く仕草をした。

「きつたねえなあ。もてねえ筈だ」

「そう言うなって」

小太郎が眉をひそめて背を向け、颯太は尻尾を振る仔犬の様にその後を追って行った。

二人は流派の違う忍び同士ではあったが、それを越えたところで互いの力を認め合い、ある意味特殊な信頼関係にあった。

颯太は、沢渡の小天狗との異名で名を馳せる小太郎をいつか真つ向勝負で獲りたいと思っている。

しかしその反面、この男の全てを見極めたいとも感じ、いつまでも追っていたい……、そんな貴重な存在に位置付けていた。

一方の小太郎は既に確信している。

（勝負すれば負ける）

颯太の中に自分以上の何かを見抜いていた。

敵対する日まで勝負する気は無い……。そして、その日が来ない事を密かに願っていた。

いつもふざけた調子で後を追って来る颯太を、若くして死んだ弟が生きていたらこんな感じか、と懐かしむような目で見ていたのだ。

いつまでもこの男とこうしていたい……、その想いは同じだった。

出会の夏

二三日晴れた暑い日が続き、会う人会う人が梅雨が明けたのかと口を開く時季。

陽が沈み表通りの提灯に火が入れられた、とある宿場町の路地裏。着物の後ろ衿を大きくあけ白く美しいうなじを見せた女が一人、木の陰から宿屋の出入口を眺めている。

優男ゆうめいの小太郎は、時には自らが女装し任務に赴く事も少くない。その日も遊女に扮し、ある男達に近づくべく待ち伏せていた。

そこへ若い男が声をかけて来た。しゃきつとすれば凜々しいであろう切れ長の涼しげな目は、今は情けなく目尻を下げている。

鼻の下を伸ばして媚びた笑顔を見せた。

それこそが颯太、その人だった。

「姉さあん、遊んでくれよお…。金はあるんだけど、いいもん持つてるぜ」

「すみませんね旦那…。今日は約束があるんですよ」

肩をすかした小太郎の背後から、颯太は尚も腰を押し付け甘えた声を耳に吹き掛ける。

「つれねえ事言っなよお…。一目で気に入っちゃったんだ」

「よして下さいよお」

小太郎は着物の上から胸をまさぐるその手を軽く叩いた。その時、宿から出て来る標的の武士二人が目に入り、小太郎は颯太の手を振り払う。

ふらふらと男達に近付き艶っぽい流し目で微笑んで見せた。案の定、男達が足を止めて興味を示し、更に小太郎は無い胸の谷間を見せるが如くに肩を歪めた。

「女、ついて来い…。酒を飲ませてやる」

「いいんですか…？ 嬉しい」

男の一人が小太郎の肩に毛深い手を回した。その瞬間。

「ちょっと待てい……。俺が先に声かけた女だ…、その薄汚ねえ手え離せ」

颯太の右手が脇差しに掛かる。

（この男……出来る！）

見切った小太郎はすかさず颯太にしな垂れかけた。

「旦那！ 助けて…」

と、その目が爛と輝き口元には勇ましい笑みがこぼれた。

「おうよ！ 姉さん任しとけ」

「若造が！」

男達が荒々しく大刀を抜き同時に颯太に斬りかかった。

しかしそこに既に颯太の姿は無く、男の一人は背後から首を掻き切られ、もう一人の振り向きざまの刃もすんなりかわし、颯太はその懐に潜り込んだ。

息絶え寄り掛かる男を押しどけて、颯太が辺りを見回す。

「あれっ？ 姉さん……？」

既に町の遊び人風に変装した小太郎は、弾む様な足取りで一人ほくそ笑んでいた。

自ら手を下さずして標的の暗殺に成功したのだ。

ついでに……。思わずニヤける小太郎だった。が、次の瞬間、背後からの聞き覚えのある声に、ピタッとその足が止まった。

「兄さん……。こっちにいい女が来なかったかい？」

颯太がキョロキョロしながら追って来ていたのだ。

内心ギクツとしながらも自然を装い振り向くと、さっきまでとは打って変わった低い声で答えた。

「さあ…？ 見てないねえ」

颯太の見開いた目が、じつと顔を覗き込んできた。

(！ ばれ…た？)

「兄さん……………、唇に紅がついてるぜ。いい事して来たね？」

小太郎は、ニヤつく颯太にホツとしながら慌てて背を向け手の甲で唇を拭った、その瞬間。

「お前……………、何もんだ？」

背中に硬い感触があった。恐らくその手に握られた脇差しの柄だ。小太郎は観念して小さく舌打ちした。

颯太は全てを察し利用されたとも理解している様だ。

しかし不思議と怒る様子は無く、むしろ感心しきりに小太郎をくまなく観察してくる。

「はあーっ、凄えなあ。まんまとやられたなあ。たいしたもんだあ。

お前……………、綺麗な顔してんだな……………。

まっ、この際男でもいいや」

颯太が小太郎の腕をがっちり掴んだ。

「な、なんだって？」

うろたえた小太郎を引っ張り、颯太が意味ありげにニツと笑って見せる。

「穴…、あんだろ？」

(ほ、本気だ…。こいつ…やばい、やられる…)

その表情と声色に未知の恐怖を感じ、小太郎は言葉を失った。手元に有る武器は懐に忍ばせた短刀だけだ。酔った標的を殺るには充分だった。

しかし、先程その腕前を目の当たりにした目の前のこの男には、さすがの小太郎も短刀一本では太刀打ちできない。

(どうにかしねえと…)

隙をうかがう小太郎を尻目に、颯太は町外れに向けてぐいぐい腕を引っ張って行った。

前方に宿屋の女将風の女が二人、立ち話をしている。

颯太はその脇を擦り抜ける様に通って行った、その直後。

「あっ！ すみません」

小太郎の涼やかな声と同時に背後に軽くつつかえる衝撃を感じ、女にぶつかった…、そう思った颯太は愛想笑いで振り向いた。

「すみませ……ん……って、あれっ？」

颯太の手が掴んでいたのは、背が高くがたいのいい中年女の腕だった。

啞然とする颯太に薄笑いの女が耳打ちする。

「いいもの持ってたって？」

その遠慮無しな手が颯太の股間を掴んだ。

「あはっ……」

颯太は思わず腰を引いて、両手を振り振り後ずさりながらペコペコ頭を下げる。

「いえ！ 嘘です……、お粗末な小物でして……。いやああ、姉さんみてえな別品さん、勿体ねえなあ……。うん、残念だなあ……。俺がもう少しな……。そっだよ悪いのは俺だなあ……。許して！ ごめんなさい」

颯太は一目散に逃げる様に走り去った。

「行つたよ……。隆さん」

中年女が家屋の陰に声をかけると、爽やかな笑みを浮かべた小太郎が姿を表した。

「すまねえな、お蔭つた」

「危なかったねえ…。あれは堅気かたぎじゃないね。
隆さん、いい男だからやっかんでんのさ。気を付けとくれよお」

お鳶が今にも吸い付きそうな目を向け、小太郎は軽く鼻で笑っただけだった。が、お鳶はとろけそうな笑顔になって首を傾げる。

そして無言で宿に入って行く小太郎の後をいそいそと追って行った。

「ご飯すぐに出来るけど、お風呂が先かしら…。ねえ隆さんったらあん！」

あの男について行くのも面白かったかもしれない、悪い奴じゃない…。
小太郎はそんな気がして口元を緩めた。

翌日。

朝から強い陽射しが照り付ける中、任務終了の小太郎は行商の出で立ちで里への帰路についた。

杉木立に囲まれた峠道に差し掛かると、木陰をすり抜けてくる風が冷やかで心地良かった。

（昼にどこかでゆっくりしても夕方には里に着くな…）

標的を待った三日間、下準備に二日間、往復の移動に二日間、一週間ぶりの里だった。

小太郎の足取りは自然と軽くなる。

その時、一瞬向きが変わった風に、湿った土と乾いた木々以外の臭いを感じ歩調を緩めた。

（汗……、複数の男の汗……。口臭…酒？）

小太郎の胸が騒ぎ始める。

付近は山賊の噂の絶えない物騒な一帯だ。

（まさか、こんな真昼間から……）

そう思いながらも背中の木箱に仕込んだ脇差しの柄に触れて確認した。

臭いからすると最低でも五人…、どこから見られているとしたら引き返すのは得策ではない。

小太郎は笠を深く被り直し歩を進めた。

間もなく前方に人の気配を感じ、小太郎はやや目線を上げて見た。

視線がぶつかる一人の男…、無精髭にボサボサの髪の毛のその男は顎をしゃくって見せた。

見ないふりで行け、と言う意味だ。

小太郎は足早にその場を過ぎ様としながらも、男達のたむろする山道の脇へと尻目に視線を向けた。そして、ハツとした。

(あれは……)

颯太だった。

夕べの残りか朝まで飲んだのか、酒臭いいびきをかいて木陰で寝ているのだ。

脇差しは既に奪われた様子だ。

(起きるな……、さすれば命までは取られまい)

しかし小太郎がその場に完全に背を向けた時、その思いとは裏腹に大きく鼻を鳴らした颯太が跳び起きた。

ふああ、と呑気に背伸びとあくびをした後、回りの男達を見回して間延びした声で言う。

「なんら……？ おまいら」

腰に手をやり脇差しを探している。

「あれっ？ どこだ……。ふっああ」

「兄ちゃん、大人しく身ぐるみ置いてけ」

男の一人が颯太を足げにした。

「何してんだあ、てめえ」

颯太が男を鋭い目で見上げ、次の瞬間、その腕は背後から男の首を締め上げていた。

「飲み過ぎで気分悪りいんだよ……、あんまり苛つかせんな」

すかさず他の男達が太刀や鎖鎌を構える。

颯太の腕がぐいぐい男の首を締め上げる。

その顔は赤黒く変色し、唇の端に泡を溜め、見開いた目は瞬きもしなくなった。

小太郎は岩陰に身をひそめ成り行きを見守っている。

なぜかあの男を放って行く気になれなかった。

やがて颯太の緩めた手をすり抜け、男はドサツと音をたてて地に崩れ落ちた。

と、同時に鎖鎌の分銅が低く唸って飛び、一瞬鋭く目を輝かせた颯太が素早くそれを跳び避けた。

が、未だ醒めきらない酒がその足元を大きくふらつかせ、おぼつかない身体を持て余した様に怒鳴る。

「んああ！ めんどくせえ！」

鎖鎌の男の振り回す分銅が、ぶうんぶうんと不気味に鳴く。

(次は……、無い)

小太郎が目を細めた。その瞬間。

分銅が再び颯太に向かって空を切り、同時に小太郎が砕いた木箱の木片を飛ばす。

それは分銅ごと鎖を絡め取り、落ちて湿った土にめり込んだ。

颯太を含め、その場の全員が啞然とそれを見つめる中、鎖鎌を持った男がずるつと膝から崩れ落ちた。

後に現れた人影は一瞬その姿を認めさせ、息を飲んだ次の一呼吸で二人の男達の間を駆け抜け、それらを一刀の下に斬り伏せた。

同時に蝉時雨が静寂を破る。

微かな風が血の臭いを巻き上げ、無表情だった小太郎が眉をひそめた。

放心状態で尻餅をついた颯太の口からは漏れる様に言葉が出た。

「姉さん？」

「お前も殺すぞ……、誰が姉さんだ」

薄笑いを浮かべた小太郎は木箱の残骸を拾い集めていた。

「あああ、大事な商売道具が……」

颯太が、やわつと手を出し、目の前の木片から鎖を外す。

「！ これ……、鉄？」

「ああ…、鉄板と木板を張り合わせてある。盾にもなる優れもんだ。何より足腰が鍛えられる」

「あんだ…、何もんだ？」

颯太は、平然とした小太郎の横顔を訝しげに見ていた。と、その目が細めた尻目に視線を向けた。

「これで貸し借り無しだ…。もう俺の穴を狙うな…」

小太郎は軽やかな笑い声を残し背を向けた。

「酒は飲むもんだ…、飲まれるな」

わずかに立ち止まってそう言うと、振り向きもせずに再び山道へ戻って行った。

去って行くその背中を無然とした表情で見送った颯太だったが、やがて思い立った様に腰を上げると、奪われた脇差しを探し出し足早に小太郎を追って行った。

再びの眼差し

小太郎は目の前で三杯目の蕎麦をすすっている男を無言で見っていた。

「ばあちゃん、お代わり」

どんぶりを両手で持って豪快な音と共に最後の一滴まで汁を飲み干し、へへっ、と人懐っこい笑顔を見せた。

小太郎は右頬だけで苦笑いする。

山道を下る途中、小太郎に追いついた颯太は、昼飯を奢らせるとしつつこく食い下がった。

小太郎は、飯が済んだらついて来るなど約束させて、ふもと渋谷の蕎麦屋に入ったのだった。

四杯目の蕎麦を平らげた颯太が更に老婆を呼び付ける。

「なあ、ばあちゃん…。握り飯って無いの？」

老婆が含み笑いして答える。

「兄さん可愛いから、特別に作ったげようね」

その、皺に埋もれた目線は小太郎に向けられていた。微笑んで会釈を返す小太郎に、老婆は微かに頬を染めた。

その様子に、颯太は眉をひそめ口をポカンと開け、驚き呆れた様子で、老婆が奥に消えるまで、その姿を目で追った。そして小太郎を見つめる。

小太郎は敢えて視線を逸らしていた。

「俺…、颯太…。日向颯太……。あんたは？」

その穏やかな声色には、ほんの僅かだが怯えがあった。

小太郎が目を向けると今度は颯太が目を逸らす。

小太郎は迷っていた。

その時々で七ツの顔と名前を使い分ける小太郎だ。

今のなりで言えば、小間物問屋若狭屋の三男坊・隆三郎なのだ。

しかし……。目の前の男、颯太は余りに真っ直ぐだった。

自らも真っ直ぐ応えてみたい……。そんな衝動に駆られていた。が、『沢渡の小天狗』、その異名がそれを邪魔する。

沢渡の小天狗小太郎を獲ったとなれば、一躍時の人になれる。名乗った途端に刃を向けられた事も一度や二度ではない。

(この男はどうだろう……)

疑心暗鬼にしか人を見られなくなって、小太郎にとって、颯太の素直さは眩しく感じられ、偽る事を躊躇ためらわせた。

「俺は…、俺の名は…、天城あまぎ…小太郎…」

「小太郎さんか…、歳は？ 俺は十七」

答えの遅い小太郎に不安を感じていたのだろう、颯太はホッとした様な笑みを浮かべた。
ホッとしたのは颯太だけではなかった。

「俺はもうじき十九になる」

小太郎の声が明るく響く。

(ひよっとして…、沢渡の小天狗を知らない？)

ふとそんな考えさえが頭をよぎった。その時。

「沢渡の小天狗…、小太郎…、小太郎さんか？」

うつむき加減で呟く様な颯太の言葉に、小太郎は頭から血の気が引くのを感じ、同時に手を脇差しにかけた。

次の瞬間、颯太がガバッと顔を上げる。

「あの沢渡の小天狗小太郎だ…、風より速く走り雲より高く飛び水よりしなやかに泳ぐ、七ツの顔と十の声色を使い分け、変幻自在・神出鬼没…、沢渡の小天狗小太郎…」

輝く凜々しい目が無言の小太郎を真っ直ぐ見据える。

「いつか…、いつか獲りたいと思ってた」

言葉とは裏腹に、その瞳に殺気は無い。あるのは尊敬・羨望・そして…、とてつもない対抗心…。

小太郎は脇差しから手を離した。

邪気の無い、ありつたけの想いを向けてくる眼差し…、以前に知る、それと似た眼差しが脳裏をかすめる。

三つ年下のたった一人の弟・仙太郎…、いつも小太郎の後を追っていた。

小太郎は十五の時、村では異例とも言える早さで大人達と共に初めての任務に就いた。

「見込みがある」

「筋がいい」

何度かの任務をそつなくこなした小太郎は、それらの褒め言葉にいい気になってしまった。

少し前まで共に訓練に励んでいた仙太郎が、急に子供じみて見えたのだ。

その日の午後、訓練を終えた仙太郎が背中に声をかけてきた。

「兄者あにじやあ…、今夜、稽古つけて貰えないかあ？」

「今夜は駄目だ」

小太郎は目もくれずに素っ気なく言った。

大人達が遊郭に連れて行ってくれろと言うのだ。

大人として認められた…、いつまでも仙太郎のお守りはしてられない…、意識的に距離を置きたかった。

「そつか…、駄目か…」

仙太郎の沈んだ声色に小太郎は苛ついた。

いつも理由も聞かずにすんなり引き下がる仙太郎の素直さをもどかしく思っていたのだ。

深夜になり、ほろ酔いで村へ戻った小太郎を待っていたのは、信じ難い報せだった。

仙太郎が地獄滝に落ちた……。

地獄滝とは、裏山の奥深いところにあり、凄まじい落差と水量を誇る。落ちた者は、その勢いに深い滝壺の奥底まで押し込められ、決して浮かび上がる事は出来ないと言われる、文字通り地獄の様な滝なのだ。

「まさか…」

薄笑いを浮かべた小太郎だったが次の瞬間、泣き伏す母とその背中に被さる様にして嗚咽を漏らす姉の姿を見つけ呆然と立ち尽くした。

「仙太郎！」

突然取り乱して駆け出した小太郎を大人達が押さえた。

「小太郎！　しっかりしろ！　行ったって仙太郎は上がったちゃこねえ」

「可哀相だが、どうしようもねえんだ」

「嘘だ！　何で…、何で落ちたって決め付ける！」

傍に居た男の胸倉を掴んで唇を震わせる。

「見回りのもんが仙太郎の悲鳴を聞いた…。駆け付けてこれを見つけたらしい」

脇に居た頭の善吉が差し出した手には、黒い長手ぬぐいあった。

「あつ…」

小太郎はそれを手に取り顔を埋め、膝から落ちて泣き崩れた。

『兄者みたいになりたいんだ……。お守りにこれ貰うよ』

小太郎が頭巾にしていたのを、半ば盗む様に持って行っていつも首に巻いていた物だった。

翌朝、地獄滝の対岸の木に垂れ下がる仙太郎の鉤縄が発見された。滝を越え様として誤ったのだろう……。怖かったろう、苦しかったろう……。う……。

自分が付いていれば、そんな危険な事はさせなかった……。仙太郎は今も生きていた……。笑っていた。

小太郎は己を呪った。

思い上がって大切な弟を死に追いやった愚かな兄・小太郎。生きるに値しない、自分が死ねばよかった。

寂しがり屋の仙太郎が暗い滝壺の底で泣いている夢ばかり見た。

変装して全くの別人になっている間は、幾分気が紛れる。

しかし皮肉な事に、その想いが変装の腕を上げさせ、名が知れ渡る度に顔と名前が増えていった。

次第に己自身の影が薄くなり、今ではどれが本当の自分なのかさえ危うくなっていた。

そんな中での颯太との出会いだった。

小太郎に追い付き追い越す…。その意欲に満ちた力強い眼差しは、心の奥深くにしまい込んだ、懐かしく愛しい者を呼び覚ます。

小太郎は、知れ渡る名と引き換える様に失くしていった何かを颯太の中に見つけた。

それは、紅く激しくどこまでも燃えあがる可能性を秘めた蒼い静かな炎を想わせる。

ただひたすらに燃え尽きる時を夢見、ただひたむきに燃え続ける。

かつて小太郎の中にも、そんな炎があった。あの日、仙太郎の死を境に消えていった…。いや…。消したつもりでいた。

心の中の炎。

しかし今気付かされた。

心の奥まで覗き込む様な颯太の瞳は、小太郎が目をそむけ続けたものを否応なしに突き付けてきた。

それは消えてなどいない…。種火の様にほんの小さくだが、心の中でこの日を待つて密かに燃え続けていた仄暗い炎。

ただひたすらに、ただひたむきに、真っ直ぐ追って来る純粋な目に、再び逢う日を待っていた。

そして、その目を向けて来るのが目の前の男……。、颯太だった。

小太郎は込み上げる熱い何かに確信した。

(仙太郎と同じ輝きの瞳を持つこの男…、この男の手に掛かるの
ら……………、本望だ)

小太郎は一人穏やかに微笑んだ後、わざとらしく鼻で笑った。

「獲れるもんなら獲ってみろ」

「ああ…、あんたを獲るのは、この俺だ」

颯太は張りのある声でそう言うと、老婆が持って来たにぎり飯にかぶりついた。

やがて覗き込んでくる様なその瞳を、今度は小太郎も真っ直ぐ見つめかえした。

颯太が口元に手を当て声をひそめる。

「すまねえが…、あんた…、金、持ってるか？ 俺の金…、あいつらに取られたみてえだ」

小太郎は呆れて、思わず目をとじ薄笑った。

「姉さん…、お勘定」

「姉さん？」

颯太は、一瞬片目をつぶって見せる小太郎を、目を丸くして見ていた。

いそいそと出て来た老婆は、いつの間にか紅をさしていた。

「握り飯のお代は結構ですよ」

微笑みを向ける老婆の頬に軽く指先で触れ、小太郎も微笑みを返す。

「よくお似合いですよ」

老婆は皺だらけの顔を更に皺くちやにして、嬉しそうに笑った。

「やだ…、兄さんったら…、お代頂けないじゃない」

颯太はただ啞然としていた。

小太郎と颯太は、結局ただ飯をご馳走になったのだった。表へ出た途端、二人は顔を見合わせ吹き出して笑った。

屈託の無い颯太の笑顔に、小太郎はふと思った。

（こんなに笑ったのは…、誰かと顔を見合わせて笑ったのは…、い

ったいいつの事だったるう…)

こうして二人の奇妙な関係は幕を上げた。

分岐路の未練

「さあ、約束だ…、飯を付き合っただから、もうついてくるな」

小太郎は木箱の木片を包んだ風呂敷包みを脇くわに抱えて背を向けた。颯太はしばらく無言で立ち尽くし、小太郎との距離を空けてその後を追った。

小太郎が足を速めると颯太も早足になる。緩めると颯太もそれにならう。

「あつ！」

突然の小太郎の声に、颯太はその顔の向いた辺りを目で探った。のどかな田園風景が広がり、青々と伸びた苗が風に揺れる。遠くに集落の屋根と竹林が見えるが変わったところは無い。

「んっ？」

懐に突っ込んだ手の肘が何かにぶつかり、見ると小太郎が細めた目で睨みつけていた。

颯太をよそ見させ、自らは立ち止まって待っていたらしい。

「あれっ？　ぐ、偶然だなあ…」

不自然な笑顔を作ってみせる颯太に、小太郎は込み上げる笑いを堪え、平静を装って言った。

「ついてくるなと言ったる…、どっか行け」

「どっかって…、行く方向が同じなんだ、仕方ねえだろうがよ」

颯太は腕組みして顔をそむけ、ぶっきらぼうに続ける。

「だいたいあんた…、噂通りなら今すぐにも俺の前から姿くらましたらどうだ」

薄笑いの挑発的な目を向ける。

小太郎は、ほんのつかの間目を合わせてから穏やかな笑顔を見せた。

「そんな無理を言うな…、ご覧の通り生身の人間だ。

噂の半分にもならねえよ。

正体見たり…、ってやつだな。

お前こそ、いつかと言わず俺の背中を狙ったらどうだ。逃げも隠れもしない…。

名を上げたいんだろ」

今度は小太郎が目を輝かせて挑発する。

「ああ…、有名になりてえよ」

颯太の真剣な鋭い眼差しが、真っ直ぐ小太郎を見据えた。

「でもな…、俺をなめんな。

あんたとは正面きって勝負してえ…、正々堂々あんた獲りてえんだ…。

悔しいが今の俺じゃあ力不足だ。あんたに勝負挑む資格がねえ。指くわえて、その背中見てるしかねえのさ…。

だが、いつかきつと…、そんな時は勝負……………、受けてくれ」

「ああ…。受けて立とう」

微笑んで深く頷き、真っ直ぐ颯太を見つめ返す小太郎の瞳は、暖かく大らかな静けさをたたえていた。

（俺を越えて行け……………、仙太郎の分も……………、俺を越えて行ってくれ）

（この人…、やっぱり綺麗だ。ああくそお！ 男にしとくの勿体ねえなあ）

颯太が小太郎の想いを知る由よしはなく、はにかんだその笑顔の裏には、そんな気持ちが隠されていた。

颯太はずっと小太郎の後をついて来た。

一定の距離を保ち、同じ歩調で、言葉を交わす事も無く…、ただついて来た。

悪い気はしなかった。

正々堂々、正面きつて勝負したい…、背中を狙っては来ない…。

颯太の言葉を素直に信じ安心して自分自身に、こそばゆい様な目の前がパツと開けた様な明るい心地がしていた。

しかし、やがてその足取りは徐々に重くなっていく。とある山道にさしかかる分岐路で、小太郎の足が止まった。

「ここからはついて来るな」

前を向いたままのその声には、穏やかさの中にも厳しい響きがあった。

何かを言いたげな、しかし躊躇する無言の颯太の視線だけを小太郎は背中に感じていた。

「じき俺の村がある…、この先は見回りがうるついている。お前も自分の村へ帰れ」

後ろ髪を引かれる思いを感じながらも、それを振りほどくかの様に歩を進めた。

立ち尽くす颯太の気配が遠ざかる。

(もう少し…、話しをしてみたかった。次に会う時は…、勝負の時かもしれないのだから)

「じく苦労さん。さすが予定通りだな。木箱をどうした？」

木立の中から聞き覚えのある声がした。

「ん…、賊に遭った」

平然と答える小太郎に、見えない声の主がほくそ笑んだ様だ。

「ふっ…、哀れな賊よな…、相手を違^{たが}えたに見える」

「ああ…、しかし久しぶりに手応えがあつた」

小太郎は山賊とは違う者を想って言った。

「ほお…、珍しい事もあるものだな。そう言えば目つきが違つな…
…。何か見つけたか」

影と声だけの男は、小太郎の姉婿・義兄にあたる先輩忍者だった。
仙太郎の死後、小太郎を気遣ってくれる一人だ。

「そうだな…、うかうかしてられないと思わされた…」

小太郎は懐かしむ様な笑みを浮かべてから声のする方向に顔を向けた。

「後で稽古つけて貰えないか？」

その思いがけない問い掛けに、やや面食らった様子の男が慌てて答える。

「えっ？ あ、ああ…、もちろんだ…。どちらが稽古つけるのかは知らんが付き合おう」

「頼むよ…、兄者」

「えっ？ 小太郎…、今何て？」

男が木の陰から姿を現す。

小太郎に兄者と呼ばれたのは初めてだった。

小太郎は爽やかな笑顔で男を一瞥し、軽く右手を上げて行った。

「じゃあな…、兄者」

「お、おう…、後でな」

男は照れ臭そうに笑って頭を掻いた。

男は、腕前では数段劣る自分が兄と認められていないのだと思っていた。

小太郎にとって、兄者と言う言葉は仙太郎を彷彿とさせ、聞くのも言うのも辛かったのだ。

颯太の出現は図らずも二人それぞれの心のわだかまりを解いた。

颯太はどこかで修行を積み、次は勝負を挑んでくるかもしれない…。そんな小太郎の予想は、数日後あっさり覆される。

その日の小太郎は、ある男達の密談を探る為、料理屋で女中に紛れ込んでいた。

料理を運び酒の酌をし、柱の陰で聞き耳をたてた。

中の一人の侍に異様に気に入られた事を除いては首尾を上々に運び終え、帰路につくべく勝手口から抜け出した。

と、そこにニヤつく一人の男が居た。

「よっ…、今夜もいい女じゃねえかよ」

着流しの襟元から出した手で顎を撫でている。

「ここぞ何してる」

小太郎は思わず眉をひそめ低い声を凄ませた。

「おいおいおい、別品さんがそんな声だすもんじゃねえぜ…、いや、夕方ここ入ってくるの見かけてさ…。でも高そうに入れねえから、出て来るの待ってたって訳よ」

颯太は悪戯っぽい笑顔を見せて、小太郎の肩に馴れ馴れしく手を回した。

「何か用か？」

小太郎は肩に回された颯太の手を振り払って歩き出した。
颯太は腕組みして後を追う。

「用って言うか…、他の奴と浮気でもしてんじゃねえかと」
「殺すぞ」

振り向いた小太郎は、短刀の切っ先を颯太の顎下に突き付けた。
が、次の瞬間には苦笑いして短刀を懐に収めた。

「冗談でもやめろ…、お前が言うとお生々しい」
「わかったよ」

颯太が不満げに唇を突き出した。
その時、小太郎がひしと胸板にしがみついてきた。
若干背の高い颯太の肩に顔を埋める。

「あ、あのお…」

漂うおしろいの香りが颯太の鼻を柔らかく包み胸が高鳴った。

料理屋から出て来た男が三人、ニヤつきながら冷やかして通り過ぎる。

「泣かすなよ」
「最近の若い者は…、ったく」

「へへ、すいやせんね…、聞き分けがなくて困っちゃう」

颯太は愛想笑いしながら、そっと小太郎の頭を撫でていた。

やがて男達の声が遠ざかる。が、颯太はまだ小太郎を抱きしめ頭を撫でている。

「いつまでやってんだ？」

冷めた小太郎の声にも颯太は離れず、甘い声で答えた。

「協力したんだからさあ…、もうちょっとだけ…、な？ いいだろお？」

「くそが！ ざけんな！」

小太郎は思わず声を荒げ、にやけっぱなしの颯太の胸を突き離れた。

「そうむきになんたって…、怒った顔も綺麗だぜ」

颯太は小さく舌を出して肩をすくめて逃げて行く。

「こつらああ！ 戻って来おい！」

言い終わった時、腕まくりして怒鳴った自分の姿に小太郎は一人失笑した。

(あいつにあっちゃ、沢渡の小天狗も形無しだな)

小太郎の中で、忌まわしい足かせにさえ思われていた異名は、颯太に獲らせる覚悟を決めた日から徐々にその重みを失い、今や単なる飾り文句に成り果てていた。

そして、勝負には程遠い颯太との再会を嬉しく感じていた。

それからも外で小太郎が一人の時には、たいていどこからともなく颯太が現れた。

次第に小太郎も颯太をあてにし、夫婦に扮したりおとし囿に遣ったりした。

颯太はその都度ぶつぶつ文句を言いながらも確実に役割をこなした。

小太郎は、颯太の素性が気になる所ではあつたが、互いを深く探らない事が暗黙の了解の様に思い、何一つ尋ね様とはしなかった。

それでも颯太と共に居る時、小太郎の心はなぜか安らげるのだった。

春に散る花

二人の出会いから八ヶ月以上が経ち、初めて共に春を迎えた頃。未だにお互いの身上等は話した事が無かった。

しかし、既にその信頼関係は深く根付き、小太郎の任務外でも共に過ごす時間が多くなっていた。

もうまる三日、雨が降り続けている。

せつかく満開に咲き誇った桜も、冷たい雨と風に、その薄桃色の花びらを剥ぎ取られてしまった。

地にへばり付いたそれらに哀れむ様な眼差しを向けながら、番傘を差した小太郎が、ひとけ人気の無い神社の鳥居をくぐる。

傘を閉じ、賽銭箱の前の石段にゆっくり腰掛けた。

霧の様に降り続く細かい雨粒が時折風に舞い、はためく白絹に見える。

「どうした…、今日はえらく大人しいな…」

小太郎の呟く様な問いに応えは無い。
暫く待って石段の陰の様子を窺うかがった。

「この時季の雨は嫌いだ」

力無く言った颯太がようやく姿を現し、のそつと石段を跨いで小太郎の後ろに腰掛ける。

「なあ、小太郎よお…、お前…、津留賀^{つるが}って聞いた事あるか？」

「津留賀？ いや、知らねえなあ」

「だろうな…、もう十年以上も前に失くなった小せえ村だからな」

小太郎は、初めて耳にする颯太の沈んだ寂しげな声色と村の話しに、その口が今から語るであろう事を察し、ただ黙って耳を傾けた。

「ちょうどこんな時季だった。

ちょうど…、今みたいに長雨が続いて…、村の裏山が地崩れしたんだ。

それが川を上流でせき止めて…、堪えきれなくなった川は、泥や木や岩…、村のほとんど全部押し流して…、俺の親父とお袋も飲み込んでった…。

お袋の腹には俺の弟か妹がいてな…、つわりが酷くて、俺は婆ちゃんちで世話になってて命拾いしたって訳よ…。

細々とだけど永く続いた津留賀流忍者もそこで絶えた。僅かに残った人達も、次々村を出てって…。

俺は四年前に婆ちゃんが死ぬまでそこに居た。

婆ちゃんが死んで町に出て、初めてお前の噂聞いたんだ。沢渡の小天狗小太郎…。若けえのに東西一と謳われてた…、これだと思っ
たよ…、身寄りも帰る場所も失くしてた俺は…、沢渡の小天狗を

探そうと決めた。生涯かけても探し出して獲ろうと……」

颯太の言葉は、後を引く様な余韻を残して途切れた。

小太郎は衝撃を受けていた。

身寄りも帰る場所も無い、颯太。

日頃見せるその明るさと笑顔は、それを微塵も感じさせるものではなかった。

しかし反面、納得出来る部分もある。

そのとてつもない精神力だ。

何事にも動じない、ある意味開き直った様な飄々とした強さがあった。

それは失うものを持たない故のものだろうか…、小太郎は目を伏せたまま待った。

待つしか出来なかった。

先を尋ねるのが恐い。振り向いて颯太の顔を見るのはもっと恐かった。

背後から狙ってくるか…、いつそその方が楽だ。

しかし、そんな事は問題では無い。

小太郎の不安は別にあった。

人生の標しるしに掲げ、全身全霊で追ったであろう沢渡の小天狗。

今の自分に颯太は気落ちしたのではないか…、獲る気も失せているのでは……………。

噂があまりにも誇張された物である事は小太郎も知っていたからだ。

「小太郎」

眩く様な颯太の声に、小太郎はハツとした。

「ん…？」

「お前は噂たがに違わねえ男だった…、俺…、決めてんだ。お前獲るぞ

……………。
俺が死ぬ寸前にお前獲ってやる…。

それまではこうやって付き纏って、お前見極めてやるからな…。覚悟しとけ」

小太郎は、ああ、とだけ応えて頬を緩めた。

颯太の力強い声色と言葉に、心が陽射しを浴びた様に明るく暖かくなるのを感じた。

そして強く思う。

（もっと…、もっと腕を上げてやる。

こいつが獲るに相応ふさわしい沢渡の小天狗に…、俺おれになってやる）

颯太が背伸びしながら薄笑った。

「俺…、お前に会えてよかった……。それまでの俺の人生は屁みてえなもんだったからなあ」

「お前なあ…、言葉を少し直せ」

鼻で笑う小太郎の背中を颯太が軽く叩く。

「人の事言えんのかよ」

そして、立ち上がって雨雲を見上げ、しつげえなあ…、とこぼす颯太には、小太郎の囁きは聞こえていなかった。

「俺もお前に会えてよかった…」

雨が小降りになり、風が雲を流す。
薄雲にぼやけながらも姿を現した陽の光が、穏やかな明日を予感させた。

しかし、二人で迎える春は、それが最初で最後である事を、小太郎も颯太もまだ知らない。

数日後の夜、浪人に成り済ました小太郎と颯太は、宿場町の飯屋に居た。ちびちびと酒を酌み交わしながら、時折着さかなに箸を伸ばし、たわいもない会話を交わす。
しかし、二人の全神経は、斜向はずかに陣取る二人の行商人に注がれていた。

今日は儲けた…、等と機嫌良さげに見せるその笑顔にも、小太郎と颯太は、同業の臭いをぶんぶん感じていた。
奴らも気付いている…、互いが様子を見ている状態だった。見えな
い神経の針が、ちくりちくり突き合っている様に感じる。

やがて、その二人が額を突き合わせて声をひそめた。が、次に耳にした二人の聞こえよがしの会話に、背を向けた側の颯太が、思わず小太郎の目を見据えてきた。

「そう言えば、お前さん沢渡の小天狗って聞いた事あるかい」

「ああ、噂にはちよいとね…。しかし、本当のところはどうかねえ…、たいした事ない様に思うがね」

「そうかい？ お前さんもそう思うかい」

「ふん、聞けばまだけつの青い若造じゃないか…。
名を売りたいだけの張り子の虎さね」

「上手い事言うねえ…。中身は空っぽってか」

二人は、顔を見合わせて、耳障りな声を上げて大笑いした。

小太郎は視界の隅に、その笑い声とは裏腹な鋭い視線を認めていた。
挑発……………、その二文字が脳裏を占領する。

そして、その挑発に軽く乗ろうとしているのが、目の前の颯太だった。

「面…、割れてんな」

ほとんど唇を動かしただけで言った颯太の、既に怒り爆発寸前のところを、小太郎の平静さがかろうじて抑えていた。

店には他の客も数名いる。いますぐここでどうこうと言う事は無いだろう。颯太もそれは心得ている。問題は店を出した後だ。

小太郎としては、男達は放っておいて姿をくらましたいところだが、やる気満々の颯太がそれを許さないだろう。

「逃げるぞ」

小太郎が、何気なく声をひそめた。

「なんだと！」

颯太は小太郎の襟首を鷲掴みにして、勢いよく立ち上がった。

「そんな事出来るか！ ふざけんな！」

「お前には付き合いきれんのだ」

ふっ、と鼻で笑う小太郎に、颯太が拳を振り上げる。

「くそが！」

「人の迷惑も考える」

小太郎の落ち着き払った声はその手を止め、颯太はバツが悪そうに周りを見回す。

客も店の主も、全員が手を止め、微かな恐怖さえ混じる驚きの眼差しで沈黙していた。

「よおし…、いいだろ。表出る。おやじ！ 勘定置いとくぞ」

颯太は、銭を台の上に叩き付ける様に置くと、小太郎の襟首を掴んだまま、表へ引っ張って行った。

その後ろ手が乱暴に戸を閉めた瞬間、行商人二人は、一瞬顔を見合わせてから慌ててその後を追って店を出た。

「何が小天狗だ！ このへたれが！ 笑わせんな！」

店の裏手から怒鳴り声が聞こえる。

男の一人は、行商用の木箱を置いて、仕込んであった小刀を手にした。
もう一人は、手に持った杖を撫でる様な仕草で、その外殻をいざらせる。

微かに反る滑らかな刀身が現れ、月灯りに不気味に光った。
仲たがいでいる隙について、沢渡の小天狗を獲る算段だろう。

裏には涼やかな音をたてて流れる小川と、その向こうに広がる竹林があった。

「誰がへたれだあ！ なめんな！ かかって来い！」

「上等だ！」

刃が激しくぶつかる音を聞いて、男達は店の陰から勢いよく踊り出た。

誰も居ない……………。

宙ぶらりんに刃を振り上げたままのキョトンとした目が辺りを探る。

風が竹林をざわめかせ、ハツと振り向いた瞬間、もう一人の男が目をむいて膝から崩れ落ちた、と、同時に黒い影が浮かび上がり、その右手がふつと舞う。

次の瞬間、男は喉元からピュツと噴き出る鮮やかな血で緩い放物線を描き、ドサツと前のめりに倒れた。

それを無表情に見下ろす颯太が呟く。

「沢渡の小天狗馬鹿にする奴あ俺が許さねえ」

背後に、腕組みして店の外壁に背もたれする小太郎が現れた。

「ったく…、血の気が多い困った奴だ」

「お前馬鹿にすんのは俺を馬鹿にすんのと同じ事だ……。お前こそ、あんな事言わせといて平気か？ 気が長げえって言うか…、長生きするぜ」

颯太が、振り向いて怪訝な表情を見せる。

ふっ、と笑った小太郎が背を向けて歩き出した。

「大人と言ってくれ」

「おい！ 俺がガキだとも言いてえのか」

颯太が、小走りに後続く。

「違うのか？」

「くっそお…、あいつらにお前殺らせりやよかつたなあ。でもあの程度じゃなあ…。だいたいあいつらが無茶苦茶なんだよ。もう少しやんのかと思つたのになあ…」

小太郎の微笑みに見守られる颯太のぼやきが遠ざかって行き、後には遅咲きの八重桜が花びらを風に散らした。

颯太にとって最後の春が、間もなく終わりを告げる。

哀愁の夏

昼尚暗い鈍色にびいろの雲の下、梅雨の名残を惜しむ様な激しい雨に打たれ、颯太が肩を上下させて息をきらせる。

足は腰の辺りまで泥にまみれ、顔には敵の返り血を浴び、右手の太刀に纏わり付いた血糊を雨が洗い流す。

その俯き加減の顔にも、髪から伝う雨が流れ、顎から滴り落ちる。

颯太は時折、金の必要に迫られ、足軽として近隣諸国の小競り合いに参戦しているのだ。

颯太の腕前はこの方面では既に知れ渡っており、戦となれば必ず誘いが入る。常雇いの武士に取り立てると言う話しも、常つねになつていた。

しかし颯太はそれらを尽く蹴うけっていた。

欲しいのは食う為の金だけだ。

恩も地位も主君も必要無い。

颯太がついて行きたいのは、小太郎、ただ一人なのだ。

ある程度の金を稼いだら、それが尽きるまで小太郎と行動を共に出来る。

何の恨みも係わり合いすら無い者を斬り捨てる…。

その過酷さに立ち向かえるのは、後のその楽しみを想えばこそだった。

今回の戦は思ったより長引いている。

小太郎に初めて会ったのは去年の今頃……、いい女だった。
小太郎が恋しい……、あの綺麗な顔が見たい……、胸が締め付けられる
様に痛んだ。

知り会って一年……、しかし、会えずにいるこの十日間の方がずっと
長く感じる。

思わず鼻で笑った。

（俺はどうかしちまつてる……。まるで惚れた女想ってるみてえじ
やねえか……………。

構うか！ 俺は小太郎が好きだ、惚れてる……、あいつに逢いてえ。
このクソみてえな命でも繋げて帰りてえと思えるのは、あいつに逢
いてえが為だけだ……………。

いい加減に、この戦……、終わらせてやる！）

颯太は鋭い目つきで遙か前方の敵陣を睨みつけた。

ゆっくり足を踏み出す。

太刀を両手で握りしめ、泥を跳ね散らして足を早めて行く。

その瞳にはもはや他の物は映っていない。視界に入ってきて来る敵は全
て一刀の下に切り捨てる……………、が、それは際限無く続くかの様
に思え、目的の場所にはまだ程遠い。

降り懸かる返り血と激しい雨が競う様に顔を濡らし、颯太の流す熱
い涙も儚く消されていく。

（まだまだ……………）

「おらああああ!!」

颯太は、込み上げるやる瀬ない思いを腹の底から精一杯吐き出して、泥にめりこむ足を更に早め、増えていく敵の中へ真っ直ぐ突き進んで行った。

辺りが一瞬青白い閃光に浮かび、地も振るう程の雷鳴が轟く。視界を歪める激しさの増す大粒の雨に、ふと思った。

(この雨が止んだら……………夏だ)

「あぢいよお」

颯太が山の斜面に仰向けに寝転んだ。

木陰のひんやりした土や草が、はだけた背中の中を熱を吸い取る。手足を一杯に伸ばしてから、快感の深い溜息をついた。

「何だよ…、暑さで参ったか？ 水、有るぞ…」

颯太はさっきから言葉少なげな小太郎が気になっていた。

湧き水の入った竹筒を差し出すが、首を横に振るだけだ。

「あっ！ 月のもんか？」

いつもならすかさず声を荒げてきそうなところだが、今日の小太郎は、ふつと鼻で笑っただけだった。

颯太はいよいよおかしいと感じ、体を起こして、そのやや俯き加減の顔を覗き込んだ。

「小太郎…、どうした？」

二重の澄んだ綺麗な目が颯太を一瞥し、唇が、すまねえ…、と小さく動いた。

「待て！」

立ち去ろうとするその肩を強く押さえ込み、再び腰を下ろさせる。

「言え！ 何があった…、言つまで帰さねえぞ」

「別に…、何も無い」

むきになる颯太とは対照的に、小太郎は淡々としている。しかし、やがて力無く伏せていくその目に、颯太は多くは聞かず、それでも大事な何かは聞き出す覚悟を決めていた。

颯太の中には以前から案じている事があったのだ。

一人自由気ままな自分とは違い、小太郎は沢渡流と言う組織の一員だ。
外で頻繁に自分と会い、任務にまで同行させている…、そんな事が村に知れたら……。
いや、知られたのか…、もう、こつやって会う事は出来ないと告げに来たのか…。
颯太の胸に言い知れぬ不安が広がった。

(嫌だ…！ 小太郎に逢えないなんて)

胸一杯になった不安が込み上げ、目頭を熱くした。その時。

「今日…、地藏盆だろ」

小太郎の重い口がようやく開いた。

「地藏…盆？」

颯太は、突然湧いて出たその言葉に一瞬頭が白くなった。
そして、ああ、と、ここまでの道すがらに見た、真新しい前掛けと供え物に囲まれた辻の地藏を脳裏に浮かべ、漂う線香の香りを甦らせた。

「お袋が泣くんだ…、地藏さんの前で…、仙太郎の名前書いた提灯つけて…、泣くんだ…。俺のせいだ…、俺が…、死なせた」

十の声色を持つと言われる小太郎、その今の声は、嗚咽混じりにた

だ震えるものだった。

両手で抱えた膝に顔を押し付けて涙を隠し、肩を小さく震わせる。

初めて見る小太郎のその姿に、颯太は、弟を亡くした時のままの、微かに幼さの残る少年を見た。

止まっている…、いや、自ら止めている……。

小太郎の心の一部は、仙太郎と共に冷たい滝壺の底で、今も時を止めたままになっている。

颯太は悲しみともどかしさ……、そして惨めな程の哀れみを感じ、次の瞬間には頭にカツと血が昇るのを覚え、無意識に小太郎の腕を掴んだ。

「立て…！ 俺を連れてけ！ その地獄滝とか言う厄介な代物んとこ…、案内しろ！」

「ほお…、なるほどな」

颯太は崖っぷちに立って、暗い碧と白い水しぶきの滝壺を見下ろし

ていた。

崖の岩肌に反響して沸き上がってくる様な轟音の中、その眩きは後ろの小太郎には聞こえていない。

奥深い森に包まれ、滝の水しぶきに冷やされた空気は、さっきまでの暑さを嘘の様に感じさせる。

風に舞い上がるしぶきが、颯太の顔に水滴を滴らせた。

一旦は躊躇した小太郎だったが、体格と腕力では優る颯太が、ぐいぐい村に向けて腕を引っ張り、さすがにそれはまずいと渋々ここまです案内して来たのだ。

小太郎は滝壺を見る事が出来ずに、少し離れて颯太の逞しい背中を見ていた。

ふと振り向くその顔には、悪戯っぽい笑みが浮かぶ。おもむろに着物を脱ぎ捨て、ふんどし一枚になると、今度は真剣な眼差しを向けた。

「見てろ」

その声は滝の轟音に飲み込まれて聞き取れない。と、次の瞬間、颯太は何の躊躇い（ためらい）もなく、真っ直ぐ伸ばした腕の先から落ちていった。

(えっ？ 颯太…？ 颯太…、今、何した？ どこ行った…)

呆然と座り込んだ小太郎は、訳のわからないまま四つん這いで崖の下を覗き込んだ。

何も変わらない…、仙太郎が消えた五年前と、何も変わらない……。

頭が中心が音と水しぶきを拒絶して消し、脳裏に不気味な静けさをたたえる滝壺をあらわにした。

(颯太も………、消え…た？)

小太郎は傍にあった颯太の着物をわし掴みにして、再び下を覗き込んだ。

(確かに居た…、今までここに居たのに…、颯太………)

軽い眩暈めまいを覚え、深い滝壺が意識を飲み込もうと両手を広げているかの様に感じる。
呼吸するのも忘れた。

(いつそ、俺も…)

手元から転げ落ちる石ころを目で追った。その時。

颯太がプハアツと飛び出す様に浮かび上がり、水面に顔を出した。両手で濡れた髪を撫で上げ、満面の笑みで手を振る。

小太郎は肩と胸ごとでようやく呼吸出来た。

颯太は腕の筋肉を隆々とさせ、力強く崖をよじ登って来た。手をついて座り込んだままの小太郎に額を突き合わせてニツと笑う。

「いなかったぜ」

「えっ？」

啞然とする小太郎の横に立ち上がり、滝壺を見下ろした。

「仙太郎…、もういなかったぜ…。成仏してあの世に逝ったんだ…。お前もいい加減に上がって来い」

振り向く颯太の微笑みは、果てしなく大らかで暖かい。

小太郎の中で、思い切り張り詰めていた何かはち切れ、涙がとめどなく溢れ出した。

それは、五年間溜めに溜めた悲しみと後悔と自責の念……、矛先の無い怒り…、その全ての結晶だった。

颯太は静かに頷いた。

「確かに地獄滝つて名は伊達じゃねえ…。
俺でさえ一瞬諦めかけた。恐ろしい化けもんだ…。
だがな、小太郎…、仙太郎はそれを越えようとしたんだろ…。
わずか十二のガキが地獄滝越えようとした…、見上げた根性だ。
必死にお前追つてたんだよ…、仙太郎は…。
さすが小太郎の弟なんだよ…」

小太郎はハツとした。

その死と言う結果ばかりを見て、仙太郎の成し遂げ様とした、最後まで挑み続けた想いになど目を向けた事がなかったのだ。

颯太の言葉…、『さすが小太郎の弟』、仙太郎が聞いたらどんなに喜んだろうか…、いや、きつと聞いていた。伝わった…。

『兄者みたいになりたいんだ』

小太郎はようやく仙太郎の笑顔と笑い声を思い出せた。

「一つ言っとくぞ。お前…、泣いても怒っても綺麗だけど、落ち込んだ顔はどうも頂けねえ…、二度と俺にしけた面見せんな。もし見せたら……」

着物に袖を通して、颯太の動きが止まる。

「ん？」

「抱いちゃうぞ」

ニヤつく笑顔で言い残し、着物のすそをまくって逃げる様に走り出した。

「おらあ！ 待てえ…、今すぐ勝負しろ！」

小太郎はその背中に笑顔で怒鳴り付けた。

「ったく…、無茶が過ぎるぞ」

颯太は少し先で腕組みして待っていた。

「小太郎よ…、俺は向こう見ずに命捨てたりはしねえ…。
だがな、これと思ったもんには命懸けで無茶してえ性たちなのさ」

「ふうん…、酔狂な」

小太郎は何気ない風に颯太の前を通り過ぎる。
その顔は、背を向けてからほころんだ。

「ほつとけ」

颯太は小太郎が通り過ぎるのを待ち、いつもの様にその背中の人に続いて行った。

颯太が追って来る…、小太郎が前に行く…、二人の心は穏やかさで満たされていた。

しかし、二人に残された時間は、あまりに短いものだった。

戸惑いの秋

沢渡の里にも秋がやってきた。

子供達が秋祭りの為に練習する、笛と太鼓の調子いいお囃子が遠くに聞こえる。

小太郎も幼い頃、この時季には仙太郎と共に練習に通った。

仙太郎は、時々ふざけて笛で調子っぱずれな音を出して、太鼓に変えられた…。

小太郎は、渋々太鼓を叩いていた仙太郎の顔を思い出し、思わず一人微笑む。

夏、颯太と地獄滝に行った日から、小太郎の脳裏には、まるで扉が開くのを待っていたかの様な仙太郎の笑顔の思い出が次々溢れ出て来ていた。

その度に胸の暖かいものが顔をほころばせ、その度に颯太の笑顔が思い出された。

その日、小太郎は頭目の善吉に呼び出されていた。

任務の話しの時はいつもそうだ。それ自体珍しい事ではない。

珍しいのは、善吉本人が小太郎を呼びに来た事だ。いつもなら、善吉の孫・清吉の役目だった。

一瞬妙な感覚を覚えながらも、そんな事もあるかと半ば強引に納得し、言われた時間に訪ねて行った。

傾きかけた夕陽が、間もなく空を赤く染め始める時刻、大所帯の善吉の家には珍しく、気味が悪いくらいに静まり返っている。その土間に片膝について頭を垂れた。

「小太郎…、参りました」

「おう！ 上がれ」

座敷の奥で文机に向かったままの善吉が、顔だけを向ける。

歳の割に老けて見えるのは、ほとんど白くなった頭髪と深く刻み込まれた皺のせいか………、小太郎は、知っていた。それが、精神の限界まで神経を擦り減らせ、肉体に鞭打って苛酷な状況を何度も乗り越えてきた男、その証である事を。

「皆、祭りの櫓組みうぐみに行かせたんだ…。
静か過ぎて落ち着かねえなあ」

座敷中央にあぐらをかいた小太郎は、机に視線を落とすその声色に微かな違和感を感じた。

（人払いしたのか…、ひよっとして…）

善吉がそこまでして、二人きりで話す必要のある事には覚えがある、いずれ来るとは思っていた…。

(覚悟は出来てる)

善吉が向き直り、柔和な表情を見せるが、小太郎はそこに微かな無理を見て取った。

「お前……、外に通じたもんが居るのか？」

穏やかな口調だが、小太郎の読み通りの問いが飛んで来た。凜とした眼差しで善吉の目を見据え、はい、とだけ答える。途端に、善吉の瞳が厳しさを帯びた。

「信用出来るのか？」

真偽を見極める様に覗き込んでくるその瞳にも、怯む訳にはいかない……、試されているのは小太郎自身だ。

「命を預けています」

瞳を輝かせ、きっぱり言い切った小太郎に、善吉は意外にも心からの笑みを浮かべた。

「ほお……、見つけ出したか」

「はい……、唯一無二、小天狗を獲らせます」

小太郎は颯太を想い口元を緩めた。

「ふうん、そうか……、いいだろう……」

善吉の顔に一瞬寂しさがよぎった様に感じたが、小太郎の注意は、次の話しに集中した。

「話しと言うのはこれからだ……、一つ頼まれて欲しい、これだ」
文机の引き出しから、一通の手紙が出された。

「これを取り急ぎ俺の古い友人ふるに届けて貰いたい……、最重要機密だ。

賊の手に渡ってもいかん。

今から支度して夜明け前に出る。
お前にしか頼めん……。いいな」

「はっ！ 承知」

ただならない様子の善吉に、小太郎も身を引き締め拳をついて頭を下げた。

しかし次の瞬間には、善吉は再び柔和な表情に戻って言った。

「すまん……、祭りだったのに……。その分、余計に銭持たしてやる……。美味しいもんでも食って来い」

「どうぞお気遣いありません様」

善吉の家を出た小太郎は、ふつと安堵の溜息をついた。颯太を認めさせた…、沢渡の小天狗小太郎を獲る者として。大きな肩の荷が下りた様な気がした。

世間に名が知れる…、それは、最期に及ぶまでの重責を伴う。小太郎の様に流派の名を背負って名を馳せる者は殊更じゆつだった。不様な死に方は、流派の名折れになるのだ。

しかし、内心、善吉ならわかってくれる気もしていた。

沢渡の頭目たる者だ、その勘の鋭さが人並み外れたものである事は小太郎も知っている。

颯太に会ってからの小太郎の微妙な変化などを敏感に察知し、会わずして颯太の人となりを見抜いたのだろう…。

（凄い人だ…）

小太郎は、改めて感服していた。

その頃善吉は、一人うなだれ、声を押し殺し人知れず涙を落としていた。

翌未明、小太郎は、まだ暗いうちに村を後にした。
行商人に扮したその後ろ姿を、善吉は陰ながら涙に濡れて見送っていた。

「すまねえ…、小太郎…、すまねえ…」

しばらく行くと、視界の隅で、色付き始めた森の中を影が走った。
影は木陰から木陰へ、途切れ途切れ走る。
小太郎が、ふっ、と微笑む。

「ここまででいいよ…、兄者…、見送りありがとう」

「ふむ、そうか…、祭りでお前と飲むのを楽しみにしておった。残念だ」

木陰の男が、溜息をついた。

「帰ったら一緒に飲もう。俺の分も祭り、楽しんでくれ。姉様には

くれぐれも腹の子に障らぬ様…」

「承知した。気を付けて行け」

「ああ、行つて来る」

小太郎はほんの少し歩を緩め、背中の木箱を背負い直しながら言つと、真つ直ぐ前を見て再び歩き始めた。

手紙を届けるだけの任務に、多少氣を楽にする小太郎だった。が、小太郎が、義兄と酒を酌み交わす日は来ず、次に帰つた時、村は変わり果てた姿になっているのだった。

ようやく空がうつすら明るさを呈した頃、黄色味を帯びた神社の銀杏ようきやうの木の下で、小太郎は天狗の絵馬を柵さくに結び付けていた。そこには、漢字で二文字、喜多、とだけ書いた。

後でそれを見た颯太が、北を目指して追つて来る筈だと、背後に気配を感じた。

「ふうん…、北に行くのか…」

漂う酒の臭いとふらつくその足元に、小太郎はカツとなった。

「今まで飲んでたのか……、俺はもう行く。ついて来るな」

身を翻す小太郎の腕を、颯太が、がっちり掴んだ。

「何だよ……、俺に来て欲しいからこんな事してんだろ」

人差し指が絵馬を弾く。

「それとも何か……？ 俺は飲んじゃいけねえのか……、ん？ 小太郎よ」

小太郎の肩を銀杏の幹に押し付け、顔を突き合わせる。

「もう夜明けだぞ……、前にも言った筈だ……」

小太郎は、睨む様に颯太を見つめた。

「酒は飲むもんだ、飲まれるな……だろ？ よおく覚えてるぜ。」

だがな……、俺にだって、飲んで紛らわしてえ想いがあるのさ……、誰かに抱かれてえ寂しい夜があるんだ……。

わかるか？ 小太郎……」

颯太がふいに額を付き合わせ、酒臭い熱い吐息が小太郎の唇を撫でた。

鼻先が、微かに触れ合う。

小太郎の鼓動が早まり、呼応するかの様に、颯太の息遣いも僅かに荒くなる。

短くて長い瞬間ときが、そこにあつた。

溢れる程の切なさをたたえた颯太の瞳がゆっくり瞼に覆われ、その唇はまだ何か言いたげに言葉を残して固く噛み締められた。

「そ、颯太…？」

颯太が小太郎の肩から手を離し、身体を斜はすにして道を開ける。

「すまなかつた…、行けよ……。
俺は酔い醒ましてから追いかける……。後でな」

戸惑う小太郎の背中を押した。

数歩行って、後ろ髪を引かれる思いに小太郎がふと振り向く。
銀杏に背もたれして腕組する颯太の、愛しげに見つめてくる真っ直ぐな瞳があつた。

（あんな目をして俺の背中を見てるのか…）

小太郎の胸の中心が疼く……、込み上げる切なさに目頭が熱くなり唇が震える……。とっさに踵を反し、足早にその場を去った。

小太郎にとっても、颯太はかけがえの無い特別で大切な存在になっている。

しかし小太郎は、それとは別の、身体を火照らせ胸を締め付ける程の熱く沸き上がる想いが、心に渦巻く事を未だ認められずにいた。

女装をしても小太郎は男、そして颯太もまた男なのだ。

常識と言つ厚い壁が、もがく魂の前に立ち塞がり、その想いから目を背けさせていた。

鳥居をくぐり小太郎の背中が遠ざかる。

既に見えなくなつた後もその背中を想い、颯太はただ見つめていた。やがて両手で頭を抱えて力無くしゃがみ込む。

(何て馬鹿な事を……。

小太郎は明らかに戸惑っていた困っていた……。

小太郎が好きだ、愛おしくてたまらない……。

応えなどいらぬに……、叶わない届かない想いを抱いたまま
小太郎に逢うのが辛くなっている……。

しかし……、逢えなくなるのはもっと辛いのに……)

間柄がぎくしゃくし、小太郎に避けられる事が、今の颯太には一番
恐く感じられていた。

高く晴れ渡る秋空とは裏腹に、小太郎の心は暗い雲に包まれている。
丸い石ころの河原に降りて、澄んだ川の流れに両手を差し込み、顔
を洗った。

秋とは言え、こんな晴れた日中に歩き続ければ汗が噴き出る。

冷たい水が肌をさっぱりさせ、気分を爽やかに変えてくれた。しか
し、それはほんのつかの間の事だった。

ここまでの道程を振り返る。

以前は気にもならなかった…、一人旅がこれ程寂しくつまらないものだとは。足が重く時間が長い……。

颯太との旅は、それが例え暗い任務であっても、多くの会話がなくても、どこか楽しい、充実感と安心感のあるものだった。

脳裏に、朝の颯太の様子が思い浮かぶ。

来ないかも知れない…、それどころか、もう逢えない気さえする。

がさつでいい加減に見えて、その心は意外に繊細だ。

それ故、傷つくと自棄^{やけ}になって何をしでかすか分からないから恐い

……。

それでも、根は正直で優しく情が深い…、いい奴だ。

急ぎなら馬を使わせてくれたらよかったのに……、それなら朝の颯太との一件はなかった。

などと善吉への恨み言を呟きながら、キラキラと陽の光りを反す、川面を眺めた。

出会って以来、共に酒を飲んだ事は何度もあったが、颯太が一人で飲んで来たのは初めての事だった。

考え始めると、颯太の事が気になって仕方ない。

(出来る事なら、今すぐにも引き返して逢ってじっくり話したい)

が、小太郎はそこでハッとする。

(話しをしてどうする…、己の気持ちにすら真っ直ぐ向き合えない

者が、颯太の想いを聞いて何が出来る……。そんな事なら、いつそもうこのまま逢わずに……)

その時、川のせせらぎに混じって、時期を遅れた蝉の声が聞こえた。それはまるで、過ぎ去った夏を呼び戻そうとでもするかの様に、高い秋空に力強く、けれど虚しく響き渡る。

(遅かったな……。可哀相に……。お前も独りぼつちか……。寂しいな)

小太郎は、涙を堪える様に空を仰いだ。次の瞬間。

「はああ！ 気合い入ってんなあ……。あの蝉……。もう仲間もいねえだろうに、精一杯鳴いてやがる……。うるせーくらいだなあ」

背後で焦がれ待ち侘びた声がして、颯太が雑草を掻き分け斜面を降りて来た。

見慣れた、いつものニヤつく笑顔を見せる。

「悪りい、遅くなっちまった……」。

酒、ちよっとでも残すと小太郎恐えからな……。今度は誘うから……。そう怒るなつて、なつ？」

いつもの様に、小太郎の肩に手を回す。

小太郎も、いつもの様に、その手を振り払った。

「待っててやったんだ……。有り難く思え」

「はいはい、おありがとおございます」

互いを一瞥しあってから、光る川面に微笑んだ。

「小太郎…、寂しくて泣きそうだったろ」

(これでいい)

「ふっ…。静けさを楽しんでたんだ…」

(これがいいんだ)

二人の内心泣きたい気持ちと穏やかさを取り戻した心は、まさに同じものだった。

又、二人の旅が始まる。

沢渡の意地

小太郎の足取りは、さっきまでとは打って変わった軽やかな物になっていた。

少し離れた後ろに颯太を感じる…、あの大らかな眼差しに包まれる様な安心感があった。

会話さえも必要無い…、ただ居て欲しい。

いつか、颯太が勝負を挑み、その手に掛かる日まで…、ただ傍に居て欲しい。

颯太は薄笑いを浮かべて、小太郎の背中を見つめている。

人生とは皮肉な物だ……。

初めて愛した人は男だった……。

しかも、いつか獲りたいと切望して止まなかった男だ。

命を獲る為に近付いた男に、今では命を差し出せる。

どれ程想っても結ばれる事は無い……。

だから、いつか勝負しよう。いつか…、あの手には掛かって…、死にたい。

それまでは、この胸の甘く切ない痛みに堪えて、あの愛おしい背中を追って行こう。

俺には、この道しか無いのだから……。

その日は、途中の宿場町で宿をとった。

目的の村には、どう急いでも、着くのは明日の夕方以降だ。

何で馬を使わせてくれなかったのだらう…、馬なら、今頃は手紙を届けて帰路についてる。

急ぎの筈なのに……。

小太郎の胸には、その矛盾が引つ掛かって離れなかった。

風呂に入り、颯太と酒を酌み交わしながら夕飯をとり、ふと村を想った。

今頃は提灯に灯が燈り、皆、櫓を囲んで踊っているのだろう。

沢渡流は、代々、一帯の領主を勤める、秋山家に仕えている。

しかし、この日ばかりは全ての仕事を休み、村人全員で祭を祝うのがしきたりだった。

小太郎の脳裏に、又、矛盾が頭をもたげた。

年に一度の祭の日に出立させる程急ぐのに、なぜ…。

目を伏せ口をつぐむ小太郎の顔に、颯太が箸の先で酒をひっかけた。

「何をする」

「お前…、俺に抱かれてえのか。前に言ったよな、しけた面見せんなって…。」

何か心配事でもあんなら言え」

言いようは、かなり乱暴だが、颯太なりの気遣いだ。

小太郎は、その気持ちを素直に受け止め、朝から、どうしても拭えない矛盾を話した。

「ふうむ…。確かに…、馬を使わせられねえ理由があるのか…、祭にお前がいちゃ都合が悪いのか…。」

ただ単に、急ぎとは言っても実はそうでもねえとか…？
わかんね。とにかく明日、手紙届けりゃ何かわかんたら」

言え、と偉そうだった割には、結局、わかんね、で済ますこの男…、それも又、颯太なのだ。

どちらかと言えば、考え過ぎるきらいのある小太郎は、颯太のこの軽さにかなり救われる事が多い。

（颯太の言う通り、今は手紙を届けるしかない…。皆もご馳走を食べているだろう…。）

俺は颯太とここで祭を祝おう）

小太郎は盃の酒を飲み干した。

その頃、沢渡の櫓の周りで人々は、泣き崩れ、怒りに拳を震わせ、愛する者を抱きしめていた。

「すまねえ……、皆。」

全部俺の責任だ……。俺を怨んでくれ」

悲痛な表情の善吉が土下座して、地に頭をこすりつける。

沢渡の村で、今、未曾有の悲劇が起ころうとしていた。

数日前、善吉は主君・秋山兵庫に呼び出され、その広い屋敷へと赴いていた。

兵庫は、細い無表情な目を向けて言った。

「善吉、喜べ……」

今回、わしは徳田様の配下に加えて頂く事になった……。庇護あずかに与れるのじゃ……。我が代は安泰じゃ」

善吉は呆然として言葉を失くした。

徳田は、破竹の勢いで勢力を拡大する、中央の国主であり、今や兵庫の近辺にも、その触手は伸びつつあった。

(御屋形様は……、戦わずして白旗を上げられた)

善吉はむしろ、いよいよ戦かと奮い立つ血に気を引き締め、勇んで馬を駆って来たのだった。

沢渡の総力あげて、最後の一人まで秋山家に尽くし戦う覚悟だった。

兵庫が機嫌よさ気な笑みを浮かべる。

「お前達沢渡の村は間もなく秋祭であろう……。そこでじゃ……。今回の配下入りを記念して、わしから秋祭の馳走を遣わそう」

「はい？」

善吉の顔が蒼白になったのを見て、兵庫が、薄い唇を歪めてニヤリと意味ありげに笑う。

「遠慮せずともよい、村人全員で…、食すがよい」

「有り難き…」

言葉の先は出なかった。

頭が痺れた様で何も考えられず、いつの間にか自宅に戻っていた。まだ歩き始めたばかりの末の孫が、背中に小さな手をかけてくる。

「おお…、よしよし」

孫を抱き、あどけない顔を見つめて涙を滲ませた。

(御屋形様は、我等に死ねとおっしゃった……)

徳田の元には、沢渡とは比べものにならない大規模な忍組織・相生あいおい流があるのだ。

その配下に入る以上、兵庫は沢渡との関係を解消する必要がある……、しかし、ただ関係を解消するには、沢渡は兵庫の秘密を知り過ぎていた。

すなわ即ち、沢渡は消される。

いにしえの時代より、秋山と沢渡は運命共同体……、世情がどう変わろうともその絆が断ち切られる事は無い筈だった。

皆で逃げるか……、いや無理だ、逃げ切れる筈がない。
相手はもはや兵庫ではない、徳田であり相生なのだ。多勢に無勢……。
一部の者だけでも……、誰を……、皆、大切な村の仲間だ。ふるいになどかけられる訳が無い……。
もはやこれまで……、万事休す、打つ手無し。

憎々しいくらいに晴れ渡った秋の星空の下、赤や黄色の提灯が揺れる。

櫓の下には、兵庫から届けられた酒樽や饅頭、鯛の尾頭付き、にぎりめし、色鮮やかな砂糖菓子までが並べられた。

それらを前に、善吉は皆に全てを打ち明け、それらが毒入りである事を告げ土下座したのだ。

どれくらいの時が経っただろう。

訳の分からない幼子達は、既に砂糖菓子を握りしめている。一人の父親が涙声で我が子に言った。

「さあ！ 食っていいぞ……、たくさんあるからな！」

それを機に、皆が箸や盃を手にして口々に言う。

「よおし！ 飲むぞ」

「ああ……、お腹空いたねえ……。たんと召し上がれ」

子供達は饅頭やにぎりめしを頬張りながら、この日の為に練習を重ねたお囃子を披露する。

若い女は、生まれて間もない赤子に砂糖水を含ませた。

「ほうら…、美味しいよ」

ある者は仲間と酒を酌み交わす。

「さあ飲め！ お前には世話になった」

「俺の方こそ…、よく助けられた…。次の世でも頼むな」

男が涙を拭って笑う。

「もちのろんだ！」

顔を見合わせて笑った。

どの顔も涙に濡れる笑顔だった。

小太郎の義兄も、女房の少し膨らんだ腹に頬を当てる。

「すまねえなあ…、お前の顔も見てやれねえ」

「あんた…、小太郎は…？」

義兄は、弟・小太郎を案ずる、不安げな女房の手を両手で握りしめた。

「あいつが一番辛えかもしれねえなあ…、全て一人に託された。でも、あいつにしか出来ねえんだ」

二人は、ひしと抱き合い涙した。

やがて、若い女が悲鳴をあげる。

「いやああ！」

腕の中の赤子が息をしないのだ。

次々と人が倒れ伏し、血を吐き胸を掻きむしりのたうちまわる。お雛子の音も、いつしか途切れ、聞こえるのは苦しげに愛しい名を呼ぶ多くのうめき声だった。

既に息絶えた善吉の幼い孫達、その顔は眠る時と変わり無い。涙と血の痕を除いては。

爪が剥がれる程に地を引つ掻き、もがき苦しむ女がいる。善吉は直ぐさま太刀を抜いて駆け付けた。

「美津…、樂にしてやるうな」

それは、小太郎の母・美津だった。

美津が、苦しみに歪む顔で頷き、善吉は一思いにその喉を掻き切った。

「後は、小太郎が…」

善吉の言葉に、美津は僅かに頷き微笑みながら息を引き取った。

そうして全員の最後を見取った善吉は、ついに刀身を自らの首に押し当てた。

涙に唇を震わせ、渾身の力を込めて太刀を引き絞る。

「うっ…」

鮮やかな血が霧の様に噴き出し、太刀を振り捨て俯せに倒れた。

先祖代々、忠義を尽くした主君だった。

死ねと言っなら死んでやるっ……、消えろと言っなら消えてやる…

……。それでも一矢報いたい……。

その想いの全てを託した、小太郎……、哀れな小太郎……。

その心が受ける衝撃と傷はいかばかりか……。

それでも、いない……、小太郎しかないのだ。

「小太郎……、頼む」

沢渡流、最後の頭目、井筒善吉、涙ながらの末期の言葉だった。

やがて、兵庫に遣わされた男が数名現れた。
あまりに残酷な光景に、声の出る者が無い。

「ここまでせねばならぬのですか…」

一人の若い男は、いたたまれずに背を向けた。

年輩の男が、他の男達に向けて言う。

「全五十八名、数を確認せよ！　そして全て焼き尽くせ！　御屋形様に係わる物、何一つ残さぬ様…、全てを焼き尽くすのじゃ！」

「はっ！」

男達は、松明を手に散らばって行った。

その様子を、木陰から寂しげな眼差しで見つめる、一人の男が居た。
男は、事の一部始終を見ていたのだ。

やがて、その姿は人知れず闇に消えた。

その頃小太郎は、酔って大いびきをかく颯太の寝顔を眺めていた。

「颯太…、お前の事、頭に話した…。認めてくれた…、嬉しかった
よ」

小太郎は、一人穏やかに微笑んでから、布団に入り目を閉じた。

颯太の目が、パチツと開き、隣の小太郎を見て、又穏やかな笑みを浮かべてから目を閉じた。

沢渡の惨劇を小太郎が知る由よしは無く、颯太との別れが近い事も、もちろんまだ知らない。

涙の最重要機密

「えっ…？ 今…、何と？」

小太郎は我が耳を疑った。

翌日、善吉の矛盾が気になる小太郎は、どうしても歩調が速まり、夕刻には余裕を持って手紙の宛先に到着した。

そして今、その民家の玄関先で呆然と立ち尽くしている。

背の低いふつくらした女が、小太郎と颯太を座敷へと招き入れ、小さな仏壇の観音開きの扉を開けた。位牌に目を向け言う。

「義父は三年前に病で亡くなっております…」。

その後、善吉さんも一度訪ねて下さり、ここで線香をあげて下さいました…。

義父の死はご存知の筈です。義父宛ての手紙とおっしゃられても…、主人は旅に出ておりますし…」

女は明らかな戸惑いの表情を見せた。

思ってもみなかった事態に、小太郎も戸惑っていた。最重要機密と聞いた…、本人以外に託すのは、はばか憚られる。

(どうしたものか)

「姉さん…、俺達、今夜の宿が無いんだが…、どこか知らないかなあ」

颯太が肘で突いてきた。

「お願いします」

ハツとした小太郎が微笑みかけると、女は丸い頬をポツと赤らめ、伏し目がちに言った。

「あ…、うちでよければ…、離れがありますから…」

小太郎は、敢えて首を横に振る。

「いけません…。ご主人の留守中に、このような美しい女性のお宅に泊めて頂くなど…」

「かまいません！ 子供達が騒がしくしますが、宜しければどうぞ…」

女は、照れてもじもじ俯いた。

微笑んで見つめ合い、女を耳まで赤くさせた小太郎を、颯太は呆れる程感心して見ていた。

(は…、ここまでいくと神業に近い)

その夜、二人はただ宿ただ飯ただ酒に与^{あずか}った。

離れに酒を運んで貰い、ちびちび手酌で飲む颯太を尻目に、小太郎はずっと手紙を見つめている。

颯太が、たまり兼ねて言った。

「開けて読んでみるよ……」

「そうはいかん……、最重要機密だぞ……」

「だがな小太郎……、考えてもみる……。死人宛ての手紙だぞ。」

沢渡の頭目がボケたんではけりゃ、それは確実にお前に宛てたもんだ……。

ここまで来させてから、お前に読ませる為の手紙だろ」

「しかし……」

颯太の言う事には納得のいくものがある……。

しかし、最重要機密なのだ。

このまま持ち帰ろうと言う気持ちだが、まだ強かった。

「まっ……、好きにするさ……」。

だがな、小太郎。急ぎだと言った意味も汲んでやれ」

颯太は、小太郎の肩を軽く叩いてから床に入った。

間もなくして、小太郎も横になった。

眠れない…、急ぎなのに馬を使わせない理由…、死者に宛てた最重要機密……。

小太郎は、思いを他へ向けた。

さつき見た月は笠を被っていた。

天候が崩れる。明日は、雨の備えをしてから出た方がいいだろう…、とにかく村へ帰らなければ。

外が白み始め、障子越しに鳥のさえずりが聞こえる。

颯太はあくびをしながら小太郎に目を向けた。

「起きてたのか」

布団に上半身を起こしたままの、その背中は無言だった。

「小太郎？」

体を起こしてその顔を覗き込む…、見た事も無い表情があった。
呆然自失、戸惑い、混乱、不安と恐怖…。

「手紙…、読んだのか……、貸せ」

手紙を握りしめる様に、小太郎の指は強張っていた。ただ事では無い…、颯太の胸も騒ぎ始める。

動かない…、いや、動けない小太郎の手から、慎重に手紙を取って読み始める。それは、まさに小太郎に宛てたものだった。

読み進めて行く颯太の顔色が失われていく。

手紙は、まず小太郎への詫びから始まる。

次に主君・秋山の沢渡に対する裏切りともとれる仕打ち…、全員で甘んずる覚悟、別れの言葉、小太郎に託した想い………、そして、最後の任務。

『御屋形様を…討て』

読み終えて顔を上げた颯太を、小太郎が真つ直ぐ見つめる。涙をたたえた無言の瞳が、多くを訴え叫んだ。

(どう言う事だ！ 説明してくれ！ 何が起きてる！ 皆はどうなった！ 何故こうなる！ 俺はどうしたらいい？)

瞬きを忘れた目から涙が溢れ落ち、言葉を失った唇が震える。
颯太の腕をすがるように掴んだ手には、渾身の力が込められた。
小太郎の爪が、牙を剥く様に颯太の肌に食い込む。
颯太は、痛みに一瞬眉をひそめただけで、それを振り払う事もせず
に受け止めた。

（酷い……………、一夜にして小太郎の全てが消えたと言うのか……………。
その悲しみ怒り絶望……………、全部俺に吐き出せ、受け止めてやる。
一人闇に閉じこもるな！
お前は一人じゃないぞ、小太郎！）

やがて小太郎の唇が小さく呟いた。

「颯太……………、俺は……………」

その手の力が抜けた。

「村へ帰るぞ…、用意して表へ来い」颯太は着物に袖を通し、後ろ
手に襖を閉めて出て行った。

颯太は、以前の参戦で見事に敵の武将を獲って、破格の俸禄を受け

ていた。

そして今、その全てを投げ打ち辺りを駆けずり回って、どうにか二頭の馬を譲り受けて来たのだった。馬なら今すぐ出て夕刻には沢渡に着く。

朝飯の仕度をしていた女への礼もそこそこに、二人は沢渡の村へ向けて馬を駆った。

何もなかった。

焼け焦げて炭と化した木材と灰…、黒と白の殺伐とした世界が広がっている。

(ここは……、どこだ……)

呆然と立ちすくむ小太郎…、ふと、その目に唯一見覚えのある物が映った。仙太郎の名を書いた白い前掛けをした、辻の地蔵……。それは、ここが間違いなく沢渡の村である事を、まざまざと小太郎に知らしめた。

そこにしゃがみ込む母の背中が幻の様に浮かんで消える。

(どこへ行つた……、お袋はどこだ……、控えめで物静かな俺のお袋は……。姉様は……。、口うるさいが、いつも俺を気遣かつてくれる姉様は……。、腹の子に障らぬ様にと言ったのに……。、兄者は……。、帰つたら一緒に飲む約束をした……。頭……。頭は……。、穏やかで優しい、尊敬して止まない沢渡の頭目……。皆……。、どこだ……。、どこへ行つた……。)

徐々に、小太郎の呼吸が荒くなる……。

込み上げる嗚咽が呼吸を邪魔し、思考を停止した脳は全身の力をも奪い去つた。

ぺたつと座り込む……。が、座っている事さえ難しく、次の瞬間その身ははたと平伏した。

後から後から溢れ出し、地に染み込んでいく涙は、既に熱を持たず冷たい……。

震えるばかりで、言葉も閉じる事も忘れた湿つた唇に砂が纏わり付く。

きつく握りしめ、地に押し付けられた拳はわなわな震え、小指の関節を小さく傷つけ血を滲ませた。

ただ見守る事しか出来ずにいた颯太が、いたたまれずにその肩に手を置いた。その瞬間。

人肌の温もりにハツとした様な小太郎が、ガバツと颯太にしがみついてきた、薫^{わら}にもすがる思いで……………。

颯太は、小太郎をひしと抱きしめた。

濡れもがいている……、全ての感情の波が、散り散りになったその心押し流そうとしているのが、手に取る様にわかる……………。

（そうはさせるか！）

颯太は、震える小太郎を抱く手に力を込め、その荒れ狂う感情の波を僅かでも鎮め様とするかの様に、低く静かな息を細く長く耳元に繰り返す。

それはさながら幼子の寝息の様に、穏やかな安息を彷彿とさせる。

今の小太郎には、どんな言葉も意味を為さない事を颯太は知っていた。

朝からどんより立ち込めていた暗い雲が、やがて雨粒を落とし始めた。

それは、小太郎の流す涙と競うかの様に突然激しさを増し、痛い程に身体を打ち伝い流れて落ちる。

それでも二人は動かない……………、小太郎のずぶ濡れの重い心と身体を、颯太の必死の想いだけが、かろうじて支え起こしていた。

小太郎の心に届くまで……………それは永遠とも思える程、長い時間^{とき}だった。

無償の想い

冷たい秋雨が止む時を忘れた様に、しとしと降り続く。

日もとつぷり暮れてしばらく経つた頃、颯太はようやくやく涙の涸れ果てた様子の小太郎を、自らの定宿じやうしゆくへと連れて帰った。

狭くて古い家屋だが、安くて飯が美味く、何より主の気のいい親父が颯太は気に入っている。

常連の颯太には大いに融通をきかせてくれるのだ。

普段は他人と雑魚寝の大部屋だが、今夜は事情が違う。無理を言つて、個室を空けて貰った。

ここまで小太郎はただ反射的に足を運び、颯太に引きずられる様にして連れて来られた。

赤く泣き腫らした目は、虚うつろに土壁を見つめ、時折ポロツと涙を流す。

「ほら、着替える」

颯太が放り投げた手ぬぐいと着物は、力無く座り込む小太郎の肩に当たり、ストンと落ちる。

しばらく哀れむ様な眼差しを向けた颯太が手ぬぐいを取り、まだ水滴の滴る小太郎の頭と身体を拭き始めた。

されるがままに着物を脱ぎ、背中を向け腕を上げ下げする小太郎に、颯太の目が涙で潤む。

（これが……、これが小天狗か！ 変幻自在、神出鬼没、東西一と謳われた沢渡の小天狗小太郎か！ 違うだろ……、違うぞ、小

太郎！ 戻って来い！ お前は沢渡の小天狗小太郎なんだぞ……、俺の運命の宿敵……、沢渡の小天狗小太郎なんだ。戻れ！ 小太郎！ 俺んここに戻って来い！（）

ハッと気が付くと、涙一杯の小太郎の瞳が颯太を見つめていた。

心の叫びは、無意識に小さく唇から漏れ出ていた。

そして、小太郎の心に強烈に響いていた。

「颯太……、ずっと傍に居てくれたんだな」

二人の目から堰^{せき}を切った様に涙が溢れ出た。

「ああ……、お前獲るまで付き纏^{まと}うって言ったろ」

小太郎が笑った……、ふっと小さくだが笑った。

「そうだったな」

「そうだ」

颯太にもようやくやく笑みが戻った。

ギシギシ階段をきしませて、颯太が親父に頼んで作らせたにぎり飯を運んで来た。

小太郎の腹が、グウッと鳴る。

(そう言えば、今日は何も食ってない)

「この親父の飯は結構食えるぞ」

颯太に促され、にぎり飯を手に取り口に運んだ。

温かく程よい塩加減が、空っぽの胃と心に染み渡り、又涙を呼び起こす。

「こんな時でも美味いもんは美味いんだな」

込み上げる嗚咽に負けじと口を動かす。

その様子を、颯太は、ただ見守った。

(食べ！ 小太郎……、お前は生きてるんだ。生きる為に……、もつと食べ)

翌朝、颯太はほんの微かな音に目を覚ました。

しばらく天井を見つめてから、荷物を持って出て行った小太郎を追う。
恐らく一睡もしていないだろう…、それは、颯太も同じ事だった。
小太郎は一人で行く気だ…、背後に大きな忍組織があると言う。
俗に言う、負け戦なのだ。

(俺を虚仮こけにしやがって…)

白み始めた空の下、小太郎は神社の銀杏いちょうの木の下に居た。

雨は一晚降り続き、空気を綺麗に澄み渡らせた。

空にはまだ暗雲が立ち込めているが、それもやがて、向きの変わった乾いた風が押し流すだろう。

新しい一日が始まる。

三日前の朝、柵に結んだ天狗の絵馬は、雨に打たれて色褪せた。

(あの日に戻れるものならば……………)

小太郎の唇が悔しさに震え、瞳は涙で覆われ視界が歪む。

全ての矛盾には理由が有った。

小太郎は、祭に居てはいけなかったのだ。

しかし、馬では戻りが早すぎる。

颯太の言った通り、小太郎を祭から遠ざけ、事が済んでから読ませる為の手紙……、善吉、最後の謀はかりごとだった。

懐から出した手紙を読み返す。

『御屋形様を討て』

最後のその一文は、大きく字が震えている。

涙の痕か、紙が数カ所よれていた。

善吉の震える背中が瞼に浮かぶ。

(殺やつてやるさ……、言われずとも殺つてやる。

徳田だろうが相生だろうが……。例え何が来たつて殺つてやる。

俺は、沢渡の小天狗小太郎……。

御屋形様に向けられた、最初で最後の刺客。命に代えても……、
獲る)

「いい目だ……。やっぱりお前はそつでねえとな……」

銀杏に肩をもたれかけ、薄笑いの颯太がいた。

「颯太……」

小太郎は振り向きざまに脇差しを抜いた。

「お前は来るな」

「ざけんな…、てめえ今まで散々人を利用して今更何ぬかしやがる…、寝ぼけんのも大概にしる」

「今までとは訳が違う」

「ぼけが！ なんも変わんねえぞ小太郎。お前が行くなら俺も行く…、簡単な話した」

颯太は相変わらず腕組みしたまま薄笑う。

小太郎の瞳が殺気に充ちた妖しい光りを放った。

「刀を抜け…、今なら負ける気がしない」

颯太は不服そうに唇を尖らせ、肩で息をついた。

「俺は勝てる気がしねえ」

大らかで暖かい眼差しの瞳が微笑む。

「悪いな、颯太…」

背中を向け、脇差しを収めた小太郎の瞳が涙に潤んだ。その時。

背後で颯太が脇差しを抜き、振り向きざま小太郎の刃がそれを受け
る。

冷たく光る刀身は、どちらも切っ先を鞘さやに残したまま半身でぶつか

っていた。

「連れてけ」

「ならん」

間近に突き合わせ瞬きも無く睨み合う瞳は、手元の刃よりも鋭く輝き、どちらにも一歩たりとも引くつもりみなぎの無い強い意思を漲らせる。

「又ここでお前を見送らせるのか…」

颯太の瞳に切なさが宿り、その手が緩んだ。

あの日、小太郎の背中を見つめていた颯太の目。

愛しげに溢れる程の想いをたたえた真つ直ぐな目…、それがまさしく今、小太郎の瞳の中心を貫いていた。

「颯太……」

その応えを求めないひたむきな眼差しに、応える事の出来ない頑かたく々な胸が震える。

小太郎の目がゆっくり伏せられた。

脳裏に、あの日聞いた蝉の声が蘇る。

時期を遅れた独りぼっちの哀れな蝉。

小太郎は可哀相に寂しかろう、と考えた。

しかし、颯太は精一杯気合いの入った蝉だと感心した。
それこそが颯太の生き方なのだ。

与えられた命を精一杯、例え短くとも全力を込め、想いのままに鳴き叫ぶ。

誰にも……、止める事など出来ないのだろう。

想いを込めて差し出された命の前では、道理も常識も余りに無力だ。

「死ぬぞ」

小太郎が刃を収める。

「承知」

颯太が刃を収める。

「阿呆が」

小太郎が背を向けてから顔をほころばせる。

「何とでも言え」

颯太が苦笑いで後を追う。

雲がちぎれ、昇る朝陽が遥か彼方の稜線にうつすら虹を描き出す。

見つめられる安心感……、見つめる悦び^{よろこび}……。
恐いものはなかった。

二人で一つを目指すのだから……。

命の舞い

日も暮れた夜の山道、小太郎にとっては歩き慣れた、その道は沢渡の村へ続く。

最後に兄者と別れたのは、この辺りだった。

子が出来たと言いに来た時の、ふやけた笑顔が思い出される……。さぞや無念であつたらう。

それでも山は変わらない……。色付いた木々は徐々にその葉を落とし、秋を深め季節を進む。

その時、風が凪いで、舞い散る枯れ葉に微かな違和感を覚えた。小太郎の全神経が辺りを駆け巡る。

（何か居る）

颯太も、捕らえようのない何かを感知していた。小太郎が足を止め、颯太が背中を合わせる。二人の緊張の糸が繋がった。

冷ややかに感じる程の無、空気が変わる。

雲間から下弦の月が現れ、木々の合間の闇から、やんわり影が浮かび出た。

その数、十五……。取り囲まれた。

（これだけの数が音も気配も無く潜んでいた……。さすが……。相生）

小太郎と颯太が、同時に脇差しに手をかけた。その瞬間、男の低い声が、張り詰めた空気を振るわせる。

「待て待て…、我等はそち等と一戦交えようなどとは思っておらん」
どの影が発しているのかは分からない…、落ち着き払った、威厳と風格のある声…。
小太郎が呟く様に言った。

「相生の紅狸々（べにしようじょう）、加藤文吉」

その目は千里を見通し、耳は草木の息遣いを聞き分ける。
稲妻を受け止めたその大太刀は一振りです三人を斬り裂いたと言つ。
疾風迅雷、一騎当千。相生の紅狸々、加藤文吉。

小太郎の出現まで長く世の噂を席巻した人だった。
かつては、西の小太郎・東の文吉、とも言われたが、小太郎の倍以上の齡よわいの為、その盛期は過ぎたとされ、すっかり名をひそめていた、名づての忍びだった。

小太郎の怪訝な表情に、所在の無い声が続ける。

「よいか小太郎…、今回、我等が利害は一致した。
長年忠義尽くした家臣に対する秋山のあの仕打ち…、主君に対しても、いつ刃を向けるやもしれん。

我が殿にあつては百害有つて一利無しの男と見た。我等が任務は状況確認のみ、あやつの身の安全など預かり知らぬところよ…。
我等はここで撤退する。あとは、小太郎…、そちの気の済む様にす

るが良い……………。

それと、小太郎……………。沢渡流、見事なまでの散り際であった。相生の紅狸々、加藤文吉、この目でしかと見届けた。

いや…、もう一花残っておったな。沢渡の小天狗小太郎……………、その手で大輪咲かせて見せよ！」

小太郎の胸に熱い物が込み上げた。

沢渡の最期を見届けた人が居た。

太刀打ち出来る筈のなかつた強大な敵の頂点、相生の紅狸々、加藤文吉……………、その人が見事と認めたのだ。

ほんの僅かだが報われた思いの小太郎は、片膝を着き、涙を堪えてどこへともなく頭を下げた。

「ご厚情……………、痛み入ります」

取り囲む忍び達も微かな哀れみの眼差しを向ける。

流派は違っても同じ忍び同士、村を愛し家族を愛する同じ人間なのだ……………。

その心情は察するに余りある。

「小太郎、良い連れ合いを見つけたな。

そち等、死ぬなよ……………」

いつか生きて又会おうぞ」

温情こもった声の後、全ての影がゆっくり後ずさり闇に溶け込む様に消えた。

途端に虫の音が、静かに鳴り響く。

「相生の紅狸々、加藤文吉…か、……でけえな」

颯太の言葉に、小太郎は、ああ、とだけ答えて、ようやく膝を上げた。

結局、姿を示さなかった文吉ではあったが、小太郎にはひしひしと感じるものがあった。

強さ故の優しさ…、優しさ故の強さ。

大切な何かを護る為に耐え抜いた、百戦錬磨、燻^{いぶ}し銀の温もり。敵^{かな}わない……、一生懸かっても敵わない。

ふと、颯太を見た小太郎は、その飄々とした横顔に、文吉と似通う風格を見出だした。

（お前も充分でけえ奴だ。颯太……、お前はとっくに俺を超えている……。）

小天狗は既にその手中にあるんだ、颯太…）

「何だ？ 抱いて下さいって目付きだな…、ん？」

颯太がニヤつく尻目に見ながら肩に手を回し、小太郎はそれを振り払ってから歩を進め薄笑った。

「ふん…、俺とて相手を選ぶわ」

「何だと？ 俺じゃ不服か…、誰にも抱かせねえぞ…、ざけんな」

背中に言い捨てられた颯太の言葉を、小太郎が笑い飛ばす。

「男の嫉妬は見苦しいなあハツハツハ」

「何がハツハツハアだ…、くそが…、ったく」

颯太はぼやいてから笑った。

小太郎の軽快な笑い声が何より嬉しかった。

沢渡の村に入り、小太郎は地蔵の前に片膝を着いた。

そして静かに頭を垂れ、その足元に、たった一滴の涙しずくを落とす。

それはもう悲しみの涙ではない…、強く固い決意に熱くなった胸が流す、証しるしの涙だった。

（仙太郎、皆…、俺はやる。兄、小太郎らしく…、沢渡の小天狗小太郎らしく…、華々しい最期、飾って見せる！）

時は、明後日…、秋山が徳田に拝謁はいえつに向かう旅の出立前夜、無礼講で酒宴が催されると言う…。
舞台は整えられた。

月の無い夜空に、微かな火の粉を弾く篝火かがりびが煌々た（こうこう）と焚たかれた、秋山邸の裏門。槍を持った二人の番人に近づく二つの人影があった。

一人は頭からすっぽり紫の透ける程の薄衣を被っている。

長い髪を一つに束ね、額の前で衣を軽く支える細くしなやかな両手が、俯き加減の顔を隠す。

もう一人は、三味線の包みと木箱を下げた太鼓持ちの男だった。

「大変お待たせ致しました…、松吉太夫まつきちたゆう只今到着でございますあい」

陽気に言いながら門をくぐろうとした太鼓持ちの行く手を、番人の交差させた槍が阻んだ。

「ちよつと待て…、女共は既に入っておるぞ……。遅れる者があるとは聞いておらんが」

番人の一人が訝しげな目を向け、太鼓持ちはあからさまにムツとした表情を見せた。

「旦那あ、この松吉太夫を他の女と一緒にして貰っちゃ困りますよ……。
……。
徳田様から直々に、秋山様をおもてなしする様にとの御達しを頂いて参ったのですから……」

ふと松吉太夫が何か耳打ちして、太鼓持ちが頷く。

「そうですか…、おいとまさせて頂きますか？ 徳田様には門前払いを受けたと申し上げましょうか」

応える様に松吉太夫の両手が衣を上げた。
白く滑らかな肌に、漆黒の瞳が篝火を妖しく映し、椿の花びらを想
わせる唇は薫がほころぶ様に薄く開いて微笑んだ。

その妖艶さにつられてニツと笑う番人達であつたが、松吉太夫はぶ
いと背を向けてしまった。

太鼓持ちが声をひそめてくる。

「旦那方あ…、宜しいんですかあ？ この松吉太夫は徳田様一番の
御鼻^{ごひしな}真^まなんですよ…、そのご機嫌を損なつたとあつちやあ秋山様
にどの様な御沙汰があるか知りやせんよ」

番人達は、ギクツとして顔を見合わせてから、慌てて言った。

「ちよつ、ちよつとここでお待ち頂けぬか…、取り急ぎ中に確認
を取る故……」

「もうよいのです…、帰りますよ」

背を向けたままの松吉太夫の涼やかな凜とした声が、番人達の顔色
を変えた。

「大変ご無礼致しました！ ささ！ どうぞ…、この事はどうか
徳田様にはご内聞に……」

二人共が今にも平伏さんばかりに頭を深く下げる。

「いいでしょう…、これも貴方方のお勤めなのでしょうから…。
殿には良くして頂いたと伝えおきます」

「かたじけのうございませす！」

ようやく振り向いて、大らかに包み込む様な笑みを見せた松吉太夫に、番人達は、同時に頭を下げた。

それは、遊女と言えども、全国に名を馳せる男の寵愛を一身に受ける、自信と風格と気品を感じさせる輝きを持って見えたのだ。

内面から滲み出る物まで扮しきる……、小天狗小太郎の真骨頂だった。

「さあさあ、宴もたけなわでございます…。」

ここらでそろそろ今宵一押し of 演目！

松吉太夫の妖艶な独り舞い！ とくにご覧頂きませす」

中庭に施された舞台上、太鼓持ちが頭を下げた。

静かな調子のお囃子が始まり、薄衣を被ったままの松吉太夫が舞台に現れる。

滑る様に滑らかに足を運び、しなやかに差し出した白い右手が、開いた扇子をはらはら舞い揺らす。

やがてお囃子の調子が上がり、松吉太夫の左手が薄衣をすつと脱ぎ
払った。

大きく開けた着物の後ろ襟から美しいうなじが覗き、艶っぽい流し
目が視線を誘い伏していく。

真紅の唇は篝火の灯りに濡れて輝き、今にも甘い吐息を漏らしそう
に緩んで開く。

「ほおお」

「はああ」

その場の全員が、感嘆の溜息を漏らした。

遊女を膝に乗せ、その開けた胸にしゃぶりついていた男達の視線も、
無礼講に酔い乱れ騒いでいた者達の目も、今は松吉太夫に釘付けだ
った。

その頃、特別な思い入れを込めた熱い眼差しで、松吉太夫を見つめ
る一人の男がいた。

太鼓持ちに扮した颯太だった。

小太郎の女装は、これが見納めだ…、初めて会った時も遊女に扮し
ていた小太郎……。

今にして思えば、あの時、既に惚れていた……、一目惚れだったの
だ。

酒でも付き合わせるつもりが逃げられて、独り朝までやけ酒を飲ん
だ。

山賊に襲われ、小太郎に救われた再会……、男だろうと小天狗だ
ろうと関係なかった……。

唯、ついて行きたかった、何一つ逃す事無く見ていたかったのだ。

(綺麗だ、小太郎……。今までで一番……。いい女だ)

艶やかに舞う小太郎の胸にも、熱い想いが込み上げていた。

颯太の視線をひしひしと感じる…。たおやかに伸ばした指先、潤んで揺れる瞳……。その先には颯太がいる……。
愛おしげに万感の想いを込めたその眼差しが、見守ってくれている……。
いつもそうだった…。出会ってからいつも……。

(颯太…。見てくれ…。俺の最後の女舞い。)

お前がいなければ、俺はあの雨の中で死んでいた。皆の後を追って死んでいた。

お前が傍に居てくれたから…。お前が抱きしめ支えてくれたから…。
今、俺は舞っている。生きていられる。

全ては、颯太……。お前と共に……)

小太郎と颯太の視線の糸は、何度も結ばれ解かれる……。

精一杯の想い溢れるその舞いは、観る者の心をも震わせていた。

訣別の絆

「おい……、お前」

低く押し殺した声が、颯太を振り向かせた。

舞台の正面、一段高い所に座する細く鋭い目の男……、秋山兵庫だった。

「へい！ お呼びで」

颯太は軽い調子で兵庫の脇に片膝を着き、空の盃に酌して見せた。

「あの女は？」

兵庫が、舞い終えて三つ指ついて頭を下げる、舞台上の松吉太夫を顎で指し示す。

その目は、女を物色する男の脂ぎったそれだった。

颯太は、しめしめと内心ほくそ笑む。

「へい……、松吉太夫でございます。徳田様から秋山様をおもてなしする様直々に言い遣って参りました」

「ほお、徳田様が……、さすが根回しの徳田と言われるだけの事はある。ふうむ、そうか……、で、あの女は床入れかなうか」

兵庫の下心に歪んだ目が、颯太に向けられた。

「床入れ……、でございますか……？ 松吉太夫は、徳田様の……」

…」

「情婦か…」

「へい…、お目を楽しませる様にとのお申し付けです」

頭を下げる颯太に、兵庫はあからさまな不快感を顔に表した。

「ふうん…、見せるだけか…。徳田様も罪な事をなさる」

「しかしながら…」

「ん？」

颯太が意味ありげに瞳を輝かせ、兵庫の耳元に声をひそめて言った。

「秋山様に秘め事をお持ちになる度胸とお覚悟がおりならば…、と松吉太夫は申しております」

「何！ あの女…、わしを試すと申すか…」

兵庫が控える松吉太夫を鋭い目で睨みつけた。

しかし、松吉太夫は少しも怯む事なく、むしろ挑発的にも見える、穏やかに涼やかな笑みを返した。

その美しい笑みにしばらく魅入られた兵庫の脳裏に、ある考えが浮かんだ。

（『英雄、色を好む』…しかし、世には男を英雄にする女も居ると言う…、徳田のここ数年の快進撃、急成長…、この女の色香の

為せる技か…。ならば、欲しい…、是が非でもこの女が欲しい！

「寝間へ連れて参れ」

兵庫は意を決した様に立ち上がり、太鼓持ちにそう言い残して背を向けた。

へい、と頭を下げた太鼓持ちがボソツと呟く。

「くそが…」

行灯の灯りに背を向け、赤い長襦袢のその女は座っていた。腰程までもある長い髪が艶めく。

兵庫が、その背後に腰を降ろすが微動だにしない。

「そなた…、中々の食わせ者であるな…」

背中に浴びせられた険しい声色に、女が微かに頭を俯ける。

「ふふ」

左手を口元に寄せて笑ったのだ。

「何が可笑しい？ 儂を馬鹿にしておるのか」

兵庫の刺す様な視線を背中に向けられた女だったが、次の声は薄笑いを含んだ。

「貴方様こそ…、徳田が恐ろしくはございませぬのか」

「はっ…、徳田など…、何の恐ろしい事があるうか…」

鼻で笑い、背中に伸ばした兵庫の手を、すつとかわして女が立ち上がる。

「嘘をおっしゃいますな」

「何だと…？」

「沢渡を犠牲にしてまでも、その庇護に与ろうとなさったではありませぬか…、よほど徳田が恐ろしいと見える」

兵庫の顔色が変わった。

一部の者しか知らない闇に葬り去った筈の事を、相変わらずの薄笑いで言う女。

「貴様…、何者…」

ようやく振り向いた女は、冷たく無表情な目で兵庫を見下ろした。

「御屋形様…、大変ご無沙汰致しておりました…。
天城小太郎でございます」

その声は一変して、低く淡々としている。

兵庫はカツと目を見開き、後ろにのけ反った。

「こ…小太郎…、な、なぜお前…、生きて…、た、た…確かに、
沢渡全五十八名と……………」

「半月前に産まれたばかりの宮路の赤子は、お知らせもまだだった
のでしょうか…。沢渡は全五十九名にございました…」

小太郎が寂しげな笑みを浮かべた。

「誰か！ 出合え！ 曲者じゃ！ 出合え！」

兵庫の叫びに、廊下に控えていた二人の男が慌てて脇差しに手をかけ腰を上げた。

同じ様に控えていた颯太が、同時に三味線の包みを天井近くまで投げ上げ、一瞬男達の視線がそれを追う。

赤い包みがハラツと舞い、二本の太刀が颯太の両手にストンと滑り込んだ。

瞬時に正面で交差したそれは、左右に大きく振り広げられ、男達は脇差しを抜く間も無くバタバタと倒れ伏した。

颯太が障子を開けて太刀を放り投げ、それをしっかりと受け止めた小太郎は、腰を抜かした様子の兵庫を睨みつけた。

「刀を抜け」

「ま…、待て小太郎…。訳が…、訳があるのじゃ」

兵庫はじりじり尻をいざらせ後ずさる。

「見苦しい…、往生して刀を抜け！」

小太郎の頬が怒りに引き攣り、兵庫を見据えて離さない目には涙が滲んだ。

「小太郎…、無理だ…。殺ってやれ」

見守っていた颯太が顎をしゃくる。

その先の兵庫は、恐怖のあまり失禁していた。

気落ちした小太郎が、ゆっくり太刀を下ろす。

あまりに不甲斐無い…、徳田に見放され相生が手を引いた目の前の兵庫は、無抵抗に震えているだけだった。

口惜しさに小太郎が涙を落とした。その瞬間。

兵庫が床の間から刀を取り、小太郎に斬り掛かる。

小太郎の濡れた瞳が瞬間殺意に輝き、素早い刃がそれを振り払い、舞う様な動きのままに兵庫を真一文字に切り裂いた。

静止する小太郎の赤襦袢の裾が揺れ、目を見開いた兵庫がドサツと崩れ落ちる。

どっ、と涙の溢れ出す小太郎のすがる様な瞳が、颯太に向けられた。

「颯太……、これだけの事だぞ、たったこれだけの事だ！
どうして……、どうしてもっと早く俺に殺らせなかった！
皆死ぬ前に俺に殺らせてくれれば……」

深い溜息をついた颯太が、跪ひざまずつき涙に震える小太郎の肩に手を置いた。

「小太郎……、その道は無かった。

沢渡の犠牲があつたから相生は手を引いた……、もし先に刃を向けていたら敵は徳田と相生だった。勝ち目はねえ。

沢渡は謀反人の汚名まで着せられて……、秋山が生き残りお前が死んだ。

小太郎……、お前に与えられた任務は、こんな仇討ちなんてちっぴけなもんで終りじゃねえぞ……。

本当の最後の任務はこれから……。生き続ける事、生きてその体に流れる沢渡の血、誇り、想い……。秋山が断とうとしたそれら全てを繋ぐ事だ。

それこそが皆の望みだったんじゃないのか？

全てがお前、沢渡の小天狗小太郎一人に託されっ……た……た……」

颯太の言葉が途切れ、小太郎がハツとしてそのしかめた顔を見た瞬間。

颯太の右手が水平に振り払う様に後方に太刀を飛ばした。

それは真っ直ぐ障子を突き破って行き、その向こうでたたたましく呼び子を吹き鳴らした男の胸を貫いた。

「颯太？」

「たいした事ねえ…、早いとこずらかるぞ」

不安げに声を震わせる小太郎に、颯太は微笑んでその背中を押してから、左の二の腕に刺さった吹き矢の針を抜いた。

(まずい…、これは…、致命的だ)

呼び子を吹き鳴らす前、男は障子の陰から颯太に向けて吹き矢を放っていたのだ。

颯太は、ほんの小さな傷に自らの命を奪う程の威力を感じ取りながらも、その許す限りの間に小太郎を安全な所まで逃がす事のみを考えた。

廊下を駆けて来る数名の人影に押し出される様に外へ飛び出す。が、既に前方も刀や槍を構えて立ちはだかる男達の壁に、行く手を阻まれていた。

敵の幾重もの円陣に囲まれながらも、笑みさえうかべる小太郎が、背中合わせの颯太に尋ねる。

「颯太、最後の二人舞い…、付き合ってくれるか？」

「おうよ！ 姉さん任しとけ！」

颯太の不敵な笑みと威勢のいい掛け声を合図に、二人は同時に一步を踏み出した。

「おらあ！ 掛かって来おい！」

それぞれが素早い太刀捌きで敵を雑倒し、再び背中を合わせまた踏み出して行く…。

それはさながら、二つの独楽こまが激しく回りながら引かれ合い弾き合う…、そんな様を想わせる。

小太郎が刃を払った敵を颯太が斬る…、颯太の刃がぶつかり拮抗する敵の背中に小太郎が刃を突き刺す…、まさに以心伝心、阿吽の呼吸。

多くの敵を前にしながらも、常に互いを視界の隅に認めていた。

しかし敵は屋敷の中から外から増え続ける。

(颯太は…)

(小太郎は…)

(俺が護る！)

二人の心の覚悟が定まった。
その時。

「静まれ！ 皆の者！ 静まれ！」

屋敷の縁側に立った一人の青年の張り上げた声が、全員の手を止め

注目を集めた。

その鋭い眼差しの青年は、小太郎と真つ直ぐ睨み合いながらも口調を穏やかにして言った。

「小太郎…、行け…」

「若！ 何をおっしゃいます！ こやつ等は御屋形様を…」

「わかつておる！」

年配の家臣に厳しい目を向けてから、青年が再び声を張った。

「よいか！ 皆の者、よく聞け！ たった今より、この茂光が秋山家当主じゃ！ 異議のある者は直ちに申し出えい！ さもなくば黙つて我が命に従え！」

「はあっ！」

全員が平伏し、小太郎と颯太も片膝をついた。

青年は、あの日沢渡を焼き払いに遣わされた者達の一人、兵庫の嫡男・茂光だった。

茂光は、先代の祖父が存命中、しばしば共に沢渡を訪れていた。その都度、祖父は茂光に言つて聞かせた。

『よいか茂光…、沢渡の民を大事にせよ。
爺の爺、その又爺の時代より秋山家は沢渡に支えられてきた…。窮地を幾度救われたか…。
秋山と沢渡は表裏一体、光と陰、どちらが欠けてもならんのだ……。忘れるでないぞ』

祖父の死後、沢渡を訪れる事が無くなって十年経っていたが、祖父の沢渡に対する想いは、その胸に深く刻み込まれていた。

そしてあの日、茂光は何も知らされないまま、沢渡へと遣わされ、その場で初めて父・兵庫の愚行を目の当たりにしたのだった。

『ここまでせねばならぬのですか』

それは、その場に居ない父に対し、茂光が吐いたささやかな反論だった。

直感が騒いだ。

(父上は御自分で御自分の首を締められた…。秋山と沢渡は表裏一体、沢渡を滅ぼしたのが秋山ならば秋山も又…。沢渡に滅ぼされる……………)

そこに小太郎の姿が無い事に、茂光は気付いていた。そのうえで口をつぐんだ。

(このままでは終わらない……………)

漠然と、しかし確信に近い予感が、茂光に次期当主としての義務と

権力と責任を自覚させていたのだ。

「行け…、小太郎…、二度と儂の前に姿を現すでない……。次は容赦せぬぞ」

茂光の声色は険しいものだったが、小太郎を見つめるその瞳には、慈しむ様な温もりと悔恨の念が宿る。

小太郎と颯太は無言のまま数歩後ずさり、踵を反して走り去った。

(生きよ小太郎…、その血…、絶やすでないぞ。誇り高き沢渡の血……、必ずや絶やすでない)

背中越しの茂光の心の声は、小太郎の胸にしっかりと届いていた。

幼い頃、先代と沢渡を訪れた二つ年上の茂光とよく遊んだ…、身分の分け隔て無く遊んだ…、聡明で慈悲深い茂光に、小太郎は密かに思っていた。

『茂光様が当主になられる頃、俺も沢渡の頭目になり、共に秋山家を盛り立てて行きたい…、お支えして行きたい』

口にした事はなかったが、それは暗黙の了解の様に、茂光も同じ期待を持っていたのだった。

それを果たせぬ無念は、互いの瞳の奥に見て取れた。

そして、その気になれば、茂光の命も奪い秋山を根絶できた筈の小太郎が、そうはしなかった想いも又、茂光にひしひしと伝わっていた。

後の世に繋ぐ……。

今の乱世にあつて、離れ離れになろうとも、先祖代々共に培った歴史、絆……、絶やす訳には行かない……、互いの身体に流れるその証……、その担う重責を痛い程に思い合っていたのだ。

共に願う。

(いつの時代にか、又……)

別れの森

追っ手は無い……。

深まる秋、ちらちらと風に落ち葉舞い散る深夜の森で、小太郎は足を緩めた。

背後の颯太の息が荒い。と、その右膝がガクツと地に落ちた。

「颯太！ どうした。」

傷を負ったのか…、どこだ！」

小太郎が、その身体をまさぐり見えない傷を探す。

「すまねえ小太郎…、足が痺れて…」

立ち上がるうとする颯太だったが、脂汗に濡れそぼつその身体は、太刀を杖にしてかろうじて起きている状態だった。

ハッと何かを思い出した小太郎の見開いた目が、颯太の虚ろになった目を覗き込む。

「毒…か…」

颯太が穏やかで寂しげな笑みを見せる。

「ふっ…、くそが吹き矢に毒仕込んでやがった…」

「どこだ！ 颯太…、どこだ！」

半泣きの小太郎が、颯太の袖を引き破り、紫に腫れ上がる傷口に唇

を宛てがい吸い付く。

「止める！」

小太郎を押しどけた颯太は、反動でドサツと仰向けに倒れた。

「小太郎…、もういいんだ。

それより顔…、見せてくれよ。

何か…、目が霞んで…、よく見えねえんだ。来てくれよ…、見えねえ…、見えねえよ…。

小太郎…、小太郎…？ どこだ？ 小太郎？」

力無い手が宙をかきわけて泳ぐ。

「颯太！」

嗚咽に息の乱れる小太郎が、倒れたままの颯太の手を取り自らの頬に押し当てた。

「何だよ…、泣いてんのか……」

空を見つめる颯太の震える指が、小太郎の涙をたどる。

「くそ…、最後にお前の綺麗な顔…、見てえなあ」

「颯太…、俺を殺れ。」

お前、死ぬ前に俺を獲るって言ったろ……」

小太郎が慌てて太刀を握らせようとするが、颯太の冷たい手は、既に閉じる力を失っていた。

「て……てめえこの野郎……、どこまで俺を……虚仮こけに……しやがる……。
お情けで……お前獲って……成仏できるか……。
お前は……生き……ろ……、いいか……、小太郎……、命を……繋げ……」

「駄目だ！ 颯太、俺を置いてくな！ 颯太！ 俺を……」

膝に抱き起こすと、焦点の定まらない颯太の目が微かに微笑み、一筋の涙を流した。

「小太郎……、俺……、お前が……好き……だ……」

「知ってるよ颯太！ ずっと前からわかってた……、俺もお前が……」

その瞬間、颯太の瞼が閉じられ、首が力無く垂れる。

「えっ？ 颯太？ 颯太……、颯太……？ 颯太！ 颯太あ！」

小太郎は泣きうるたえながら、すがり付く様に颯太の身体を抱きしめ、揺り動かした。

「ふざけんな！ 颯太！」

「てめえ、人おちよくんのも大概にしろ！ 目え開ける！ 今すぐ勝負しろ！」

「颯太！ ……承知しねえぞ！ ……逝くな！ 颯太、颯太……颯太ああああ……」

応える者を失った小太郎の叫びは、闇に包まれた森の木々にこだまして虚しく消える。

「颯太……」

小太郎は、もう決して開く事の無い颯太の唇に、涙ながらの長い口付けを交わし、汗でまだ額に纏わり付くその髪を愛おしげに撫で上げた。

「俺も……お前が好きだ……、颯太……、お前が……、大好きだ……」

涙が視界を奪い、嗚咽が言葉を奪う。

ありつたけの想いを込めた颯太の瞳が、小太郎を見つめる事はもう無い……。

優しさの滲み出る乱暴な言葉も……、気を軽くしてくれるいい加減な口調も、もう聞く事は無い。

肩を抱くニヤつく笑みも、屈託の無い笑い声も……、全て消えた……、永遠に……。

小太郎は、颯太をただ抱きしめた……、小さく身体を揺らしながら……、頬と頬を擦り合わせ……、ただ抱きしめていた。

その身体が冷たく強張っても……、ただただ……、抱きしめていた。

夏祭りで購入して来たのだろうか…、赤い天狗の面を持って、友人達を追い回す少年がいる。

八歳のこの少年の名は、こやすさいぞう子安犀蔵。

そして今、玄関先の縁台に腰掛け、この犀蔵の姿を、暖かい眼差しで追う一人の中年の男がいた。

一見ありふれた農村にしか見えないこの村は、草月流忍者の里であり、小柄ながら着物の上からも見て取れる程筋肉質な身体その男は、頭目・須賀田孫七である。

孫七は、犀蔵の持つ天狗の面に、九年前のある男の面影を脳裏に浮かべていた。

九年前の春先、桜の枝にようやく蕾が付き始めた頃だった。夜、孫七を訪ねて来た者があった。

「頭…、隆三郎が取り急ぎ頭に話したい事があると…」

「隆三郎が？」

隆三郎は、二日前、牢屋に入れた、地方の小間物問屋の三男を名乗る男だった。

冬の雪山で行き倒れていたところを、村の女忍・志乃が発見して連れ帰り、ふた月以上も匿かくまっていた。

しかし、二日前、貧血で倒れた志乃を、姉・和栄が見舞い、その時、隆三郎の存在が明るみとなったのだった。

忍の里でよそ者を匿かくまう事は、裏切り行為であり、処刑にも相当する。即座に二人は引き離され、志乃には監視が付けられた。

土間に跪ひざまつき頭を下げた隆三郎は、青白い肌に無精髭をたくわえても、その顔立ちの良さが際だつ二十歳前後の青年だった。

瞳は強い意志を示すかの様に凜と輝き、その表情には、孫七の方が一瞬たじろいだ程の鬼気迫るものがある。

孫七は反対する手下を表で待たせ、二人きりで話しを聞く事にした。

「話しとは？」

口調は穏やかながらも厳しい目付きの孫七を、隆三郎がしかと見据える。

「はい…、実はわたくしには、志乃にも明かしていない素性がござ
います」

「素性？」

「はい…、かつてはわたくしも忍びの端くれにございました…。
お頭様は、沢渡流と言つのお聞き及びではありませんか？」

「沢渡…、半年程前一夜にして謎の内に消滅したと言つ、あの沢
渡か！」

驚きを隠さない孫七に、隆三郎は淡々と答える。

「はい…、わたくしは、その唯一の残党にございます…。
沢渡は主君の裏切りに会い、自ら絶命を余儀なくされました…。
わたくしは沢渡の名の元に、主君をこの手に掛け^{あだ}仇をなした後、最
愛の友も亡くし、生きる意味を見失い死に場所を探してさ迷つてお
りました」

「それで雪山に入ったか…」

「はい…」

小太郎はふらふら迷っていた。
帰る場所も、仲間も任務も無い……、生きる気力さえ失った。

民家の洗濯物を盗んで身に纏い、畑や果樹園から盗った物で飢えを満たし、寺社や廃屋の軒先で雨露を凌いだ。

何度自ら命を絶とうとしたか……、しかし、その度に脳裏で颯太が微笑んだ。

『生きる小太郎……、命を繋げ……』

ふと笑顔になって振り返る……、が、やはり颯太はいない。
灰色の空が舞い散らす、この冬初めての雪が、冷たい北風に吹き流されて行くだけだった。

（颯太……、まだ生きなきゃ駄目か？ 背中が寒いんだ……、お前のいない背中が寒い……。）
颯太……、お前に逢いたい……）

汚れた身なりでぼろぼろに泣き濡れ、ふらふら歩く小太郎に、すれ違う人々は忌み嫌う目を向け遠巻きに足早く去って行く。

これが沢渡の小天狗小太郎、その人だとは誰も思わない……、いや、沢渡が消滅し小天狗小太郎も死んだ……、人々の記憶にもその名はもう無いのだろう。

沢渡の小天狗小太郎は、颯太が獲り、代わってその名を世に知らしめる筈だった……、それが小太郎の望む最期だった。しかし、獲る者を失った小天狗は、もはや色褪せた魂の抜け殻と成り果てた。

吹雪が止んだ深夜、何かに憑かれた様に宛も無く歩く小太郎の目の前に山道が現れた。

その周囲の趣は、沢渡に続くそれを彷彿とさせる。

小太郎は懐かしむ様な笑みを浮かべて足を踏み入れた。

既に膝程までもある雪が、素足に草履履きの小太郎の足を痛い程に冷やし、身体の芯から熱を奪っていく。

しかし、色も音も全てを雪に覆い隠された真つ白な静寂は、小太郎の疲れ果てた心を穏やかにした。

薄雲から月灯りが漏れ、凍てついた雪の表面を煌めかせる。

それはまるで優しく囁きかける様に艶めき、小太郎を誘った。

『さあ、いらっしやい……。もう充分……。私の中で眠りなさい……。安らかに、心地良く……。ゆっくり……。殺してあげる』

歩みを止めた小太郎は、雪の真綿の中にうずくまり、丸め込んだ身体を預けた。

そっと目を閉じ流す涙は、冷え切った肌が痺れる程に熱いものだった。

『くそが！ 何してやがる……。起きろ！ 立て！ 小太郎！ 俺が

追いつけたのは、そんなしょうもねえ男じゃねえぞ！』

(颯太……、もう勘弁しろ……、お前の傍に行きたい……)

脳裏の颯太が呆れた様に笑った……、大らかに包み込む様な暖かい眼差しを向けて……。眠りに落ちる小太郎の顔にも僅かな笑みが浮かんだ。

温かい……、瞼に明るい陽射しを感じる……、小さく聞こえる鳥達のさえずり。

小太郎は胸一杯の息を吸い込んで、虚ろに目を開けた。が、直ぐにハッと目を見開き跳び起きた。

(……はどこだ……、どうやってここへ……、この女は誰だ！)

見知らぬ部屋の布団に、裸の女と抱き合う様に眠っていたらしい。浅黒いが滑らかな肌のその女は、パチツと目を開け背を向けて起き上がると、ぼやきながら男物の着物に袖を通した。

「ぼけが！ 死ぬんなら他でやれよ……。お陰でつまんねえもん

拾っちまったじゃねえか……、くそが……」

「颯…太？」

聞き慣れた、耳に心地良い程の荒い口調に、小太郎の目が涙に潤む。

「ああ？ 俺は颯太じゃねえ…ぞ…、な…何…泣いて……」

小太郎は思わず振り向きざまの女を抱きしめていた。

一瞬身をすくめた女だったが、次の瞬間、その手は小太郎の涙に震える背中を優しく摩さすっていた。

小太郎はわかつていた。

(颯太じゃない…、これは颯太じゃない……)

それでも女をきつく抱きしめ、ひとしきり泣いた。

人と言葉を交わす事自体が久しかった…、生きていると言うにはあまりに無気力だった小太郎は、人々から目を背けられ無視され、己の存在すらが臍はらげになっていた。

しかし、その颯太に似た口調の女は、確かに小太郎の呼び掛けに応えた。

小太郎の存在を認めたのだった。

「あのさあ…、何かよっぼどの事あったんだろうけど……、命、粗末にすんな。

わかんねえけど……、あんた綺麗な顔してんだしさ…、勿体ねえぜ」

小太郎の背中をぼんぼん叩いて、女がニヤツと笑う。

「俺は、志乃……、颯太じゃねえぞ。寝ぼけんな」

女は、呆然と立ちすくむ小太郎の腕からスルツと抜け出し、たんす箆筒から着物を出した。

「あんたのは捨てた……、ひつでえ汚れてたから。」

これ……、死んだ親父のだけど、ねえよりは増しだろうよ」

小太郎は胸に込み上げる熱い物に生命いのちを実感した……、そして微かな喜びを伴う確信を得ていた。

（颯太だ……、颯太が志乃に巡り逢わせた）

志乃の言葉の端々に颯太の面影が浮かぶ……、気遣いと思いやりを隠す様な乱暴な物言いは、まさに颯太のそれだった。

（颯太は居た……、ちゃんと見ていてくれた）

小太郎には、墮ちて行く自分を見兼ねた颯太が、志乃の口を借りて目を覚まさせようとした……、そう思えてならなかった。

膝を落として泣き崩れる小太郎に、志乃は何一つ尋ねようともせず、その拳に落ちる綺麗な涙をただ見守っていた。

導きの冬

「いいか…、この村は閉鎖的で、よそ者を嫌う……。絶対表に出るな」

志乃は、小太郎に何度もきつく言った。

身も心も衰弱しきつた小太郎だったが、数日の内には、その立ち居振る舞い等から、志乃とこの村の秘密に気付いた。

（志乃は女忍…、とすれば、この村は忍びの里。

見付かれば志乃もろとも殺される…。

俺は出て行かねば…、志乃の為にも…）

その夜遅く、小太郎は志乃を向かいに座らせ、出て行く事を告げ礼を述べた。

しばらく黙って俯いていた志乃がようやく顔を上げ、小太郎を睨む様に見て言った。

「ざけんな！ てめえそんな弱った身体引きずってっただって、その辺で野垂れ死ぬのが落ちだぞ…。

救われて有り難てえと思うなら、きっちり身体治してから出て行きやがれ…。ふざけやがって…」

「お前は優しいな」

小太郎が穏やかな笑みを浮かべ愛しげな眼差しを向けると、志乃は

突然涙ぐみ顔を背けてしまった。

「ここは忍びの里、お前は女忍……。見付ければ二人共殺される」
呟く様な小太郎の言葉に、志乃が顔色を変え、懐刀を抜いた。

「お前……、何者……」

「雪山に迷い込んで行き倒れた小間物問屋の三男……、若狭隆三郎」
突き付けられた刃に怯む事なく、平然と答えた小太郎の見え透いた嘘に、志乃はプツと小さく吹き出して笑った。

「女だと思つてなめやがつて……」

志乃は、そうは言いながらも、この男の素性を追及しようとは思わなかった。

出会ってからたった数日で、この男の涙をどれだけ見ただろう……、眠りに就いてさえ、まだ尚泣いていた。
その心がよほどに傷付き疲れ果てているであろう事は、想像にたやすい。

志乃には、心の痛みに涙出来る者が、悪い者である筈がない様に思えた。

隆三郎と名乗るのならば隆三郎でいいのだ。

懐刀を収めた志乃は、ふと寂しげな表情を見せた。

「もうしばらくだけ……、居てくれないか？」

十六になったばかりの志乃は、数年前に父親を亡くし、共に暮らした母親も半年前に亡くしていた。

村中に嫁いだ五つ上の姉は、男の身なりをする妹を恥じ近寄らない。

志乃も孤独だったのだ。

その孤独を紛らわせる為に、時折裏山をぶらついていた。

そんな中、小太郎を見つけたのだった。

雪にも負けない程の白い肌、薄い紫になった唇…、そして涙の痕…。雪と共に解けてしまうのではないかと思える程に、儂げで美しかった。

やつれ痩せ細ったその身体は、女の志乃でも家まで負ぶって帰れた。

母が死んでから、部屋で独り言ばかりだった志乃は、応える者のいる喜び温もり安心感と張り合い…。

忘れかけていたそれらを噛み締める様に味わい、二度と失くしたくないと感じていた。

「しかし……」

小太郎は迷い悩んだ。

確かに志乃の言った通り、行く宛ても金も無いまま癒えきらない身体で冬空の下、出て行ってどうする。

もう死ぬつもりは無い…、だからこそ迷い悩んだ。

しかし、志乃にこれ以上の迷惑はかけられない。

と、その時、俯き考え込んだ小太郎の両腕を、志乃がひしとすがる様に掴んだ。

「お願い…、行かないで…。」

春まで…、せめて雪が無くなるまで一緒に居て…。」

小太郎が初めて聞いた、志乃の女らしい言葉だった。

「お前…、何故男のなりをする？」

その問い掛けは、小太郎が尋ねたいと思いつつも尋ねられず、志乃がいつか尋ねられると思いつつも触れなかつた事だった。

ゆっくり俯いた志乃が力無く語り始める。

志乃には姉・和栄との間に、二つ上の兄が居た。しかしその兄は、七つの時に肺を患い亡くなった。

『たった一人の男の子だったのに……！』

うずくまり嘆き悲しむ母の、幾度ものその叫びは、五つの志乃の耳には違って聞こえていた…。

（女の子は二人もいらぬのに……）と。

それ以来志乃は、村の男達を真似、ついて回り、母の為に男になるうとした。

それは既に、幼いながらも志乃の女の意地だったかも知れない。

母も姉も、志乃を批難したが父は違った。不用意な母の言葉に幼心を傷付けた志乃を、暖かい眼差しで見つめて言ったのだ。

「お前は心根の優しい女の子だ」

志乃は父に抱き着き、声を押し殺して泣いた。兄を慕い、兄者兄者と懐いていた志乃が、その死後初めて見せた涙だった。

志乃・十歳…、任務中の父が敵の手に落ち、帰らぬ人となる僅か三日前の事だった。

そして志乃は女に戻るきっかけを失くした。

話し終えた志乃が小刻みに肩を震わせ、膝に置いた手の甲に涙を落とす。

小太郎は、志乃の姿に以前の自分を見た。

弟・仙太郎を亡くし、代わりに自分が死ねばよかったと、己の生を恨んだ日々…、生きる悦び楽しみ…、それらをまるで罪の様に感じた辛い日々…、颯太に出会うまでそれが癒される事はなかった。颯太は命懸けで小太郎の心を救い出してくれたのだ。そして今、颯太を感じさせ、小太郎に再び生きる気力を与えた目の前の志乃が、両親を亡くして尚その苦しみの中に居る。

志乃の悲しい程の純情が手に取る感じられ、小太郎の胸が締め付けられる様に痛んだ。

次の瞬間、小太郎は思わず志乃を抱きしめていた…、女としての志乃を、きつく抱きしめた。

「健けなげ気で優しい…、いい女だ…」

髪を撫でる小太郎の囁きに、腕の中で震えていた志乃は、その胸に顔を埋め嗚咽を漏らして泣き始めた。

志乃も又、男の身なりをしながらも、女として認めてくれる誰かを求めていたのだ。

いつだったか颯太が言った…、神様仏様と言うのは、えらく気まぐれな方々だ。

女装を得意とした小太郎と男の身なりをした志乃…、そしてその二人を引き付けたのは、小太郎への一途な想いを抱いたまま旅立った颯太なのだ。

気まぐれに操られた人生の皮肉か…。

やがて二人の唇は自然と重なり、小太郎に優しく抱かれた志乃は、心底から女の悦びを初めて知った。

小太郎も志乃も、見つかるその日まで、短くとも命の限り共にあるうと、互いの真っ直ぐな瞳に願い誓い合ったのだ。

腕組みして目を閉じて聞いていた孫七が、心まで覗き込む様な険しい目を、一呼吸小太郎に向けてから口を開いた。

「お前…、沢渡の…、名を何と申す」

「はい…、天城小太郎と申します」

「沢渡の…、小太郎…！」

孫七の目が驚きに見開く。

「あ…あの小太郎か…！ 沢渡の小天狗…小太郎！ 闇に紛れ人に紛れ、七つの顔と十の声を持ち、目にも留まらぬ太刀捌きで風と共に消えていく…、変幻自在、神出鬼没…、あの小天狗小太郎か…」

小太郎は静かに俯いた。

「はい…、名ばかりが尾鱗おひれを付けて独り歩き…、その実このてい
たらく…、お恥ずかしい限りにございます」

「沢渡の小天狗小太郎…、何故今になって素性を明かす？」

孫七が身を乗り出したと同時に、小太郎はガバツと手をつき平伏し、訴える様に言った。

「どうか御頭様…！ 志乃だけはお見逃し願いとっございます…。
わたくしは如何様いかようにでもなさって頂いて結構です…。

しかし、志乃だけは…、志乃だけは何卒…、あれはただただ優しいだけの純粋な女子でございます。

わたくしを匿^{かくま}う事で自分がどうなるかさえ考えてなかった。

わたくしの素性を御頭様にだけお話する事で、志乃の無実を信じて頂けないかと考えました…。

何卒志乃だけは…、志乃の腹には…、わたくしの子がおります」

「何！ 志乃は…、お前の子を身籠^{みこ}つておると…」

孫七の驚きに充ちた声色に、小太郎は地に額をこすりつけて涙声で言った。

「何卒お許し願います！」

全て失ったわたくしに再び与えられた家族でございます…。

この命に代えて…、どうか…、志乃は…、志乃と腹の子だけは…、何卒お見逃し願います！」

平伏したままの小太郎の肩が震える。

孫七は短く唸^{うな}って考え込んだ。

志乃の父親は孫七の弟分だった。

志乃の事は生まれた時から見ているのだ、人となりはよく知っている。

小太郎の言う通り、表も裏も無い心に素直なだけの女だ。

そしてこの小太郎…、噂に聞いた沢渡の謎の消滅と、その主君・秋山兵庫の突然の病死…、つじつまは合う。

何より、固い決意を漲^{みなぎ}らせ輝く瞳に見えたのは、真実以外の何物でもない…、乞^こうているのは自らの命ではなく、志乃と腹の子の命

なのだ。

そして面識は無いが、沢渡の頭目が、いや、全員が自らの命と引き換えに遺していった男、沢渡の小天狗小太郎……。沢渡の宝であり、誇りであり、象徴であり……。その全てなのだろう。

孫七は我が身に置き換え、思いを巡らせた。

残念ながら今の草月には、小太郎に匹敵する者が見当たらない……

……。微かに羨む^{うらや}気持ちをよぎらせながら孫七は意を決した。

断つ訳にはいかないのだろう。

忍びが忍びの里に流れ着き、二つの流派の血を併せ持つ子が産まれようとしている。

今、己の胸一つに委ねられた、何かとてつもなく大きなものの意図を感じていた。

「小太郎……いや隆三郎……。お前と志乃は裏山の炭焼き小屋に監視を付けて住ませる。

そして産まれた子は、志乃の姉、和栄^{かずえ}夫婦に育てさせる。

よいか、お前達どちらか一人でも我等を裏切る様な事があれば、真っ先に子を殺す……。肝に銘じておけ」

「あ……。御頭様……。何と……」

孫七の寛大さに、感涙にむせぶ小太郎は言葉を失い、ただ泣き伏した。

「沢渡の小天狗との異名をとった程の男の子……。どんな珠^{たま}になるか、儂も見てみたくなかったわ……」

孫七は自分自信に納得した様に何度も頷き、土間に降り立つと、小太郎の肩に手を置いた。

「辛かったな…」

その眼差しは、哀れみに充ちながらも敬意の念を込めた厳かなものだった。

小太郎は、ようやく沢渡の皆の想いが報われた気がしていた。

沢渡の血はこの草月の里で息づいていく……、命を繋いでいく…。

それは、沢渡や小太郎の名を知る者が無くなった後も、ずっと永遠に繋がり続けるだろう。

小太郎は、全身の血が悦びに騒ぐのを鳥肌が立つ程に感じていた。

繋ぎし者

犀蔵が八歳になってすぐの冬のある日。
早朝から降り始めた雪が、全てを白く包み込み、夜更けになってようやく止んだ。

頭まですっぽり布団を被って眠る犀蔵の身体を、母が激しく揺すり起こす。

「犀蔵！ 起きな！ 早く…」

寝ぼけ眼をこする内に綿入れを羽織らされ、母に手を引かれて表へ出た。

肌を刺す様な澄み切った冷気にブルツと大きく身を震わせ、無言で新雪を踏み進む母の背中に尋ねる。

「おつかあ…、どこ行く？」

吐く息が白く広がって消える……、返事は無かった。

が、その足は裏山の炭焼き小屋に向いている。

長く使われておらず、崩れかけて危険だから絶対に行ってはいけないと聞いていた…、しかし犀蔵は、仲間達と何度か肝試しに来た事があつたのだ。

使われていない筈の小屋に、動く人影を見た。

仲間達と転げる様に逃げ帰った記憶が蘇る。

眠気はすっ飛び、神経が冴え渡る……、思わず母に引かれた手に力を込めていた。

朽ちた外見に似合わない、狭いが小綺麗な部屋に、その人達は居た。隅で行灯あんどんの灯りが揺れ、湿った畳のせいだろうか…、微かに酸すい臭いが鼻をつく。

布団に横たわる女性は生きているのか死んでいるのか…、青白い肌は冷ややかに、閉じた瞼は二度と開く事がない様に見える。

犀蔵は母に背中を押され、その枕元に座らされた。と、向かいに座る男性と目が合った。

無言で細まった優しいその目が、犀蔵の騒いでいた胸を落ち着かせた。

「犀蔵…、この人は私のたった一人の妹、志乃…、お前を産んだ本当の母さんだよ」

母が突然告げた真実は、その静か過ぎる声色の為か、犀蔵に大きな衝撃を与えるものではなかった。それよりも、母が握らせた女性の手の温もりの方が、犀蔵には驚きだった。

(生きてるんだ……)

「志乃…、犀蔵連れて来たよ…、犀蔵だよ…、お前の犀蔵だよ…」

母が涙混じりに呼び掛けた。

次の瞬間、女性は瞼を重たげにゆっくり半分程開き、微かな涙を零しながら口元を力無くごく僅かほころばせた。

(私の赤ちゃん…、大きくなって…)

その、声にならない声は、不思議と犀蔵の脳裏に染み込む様に広がって聞こえた気がしていた。

程なくして、犀蔵を待っていたかの様に、女性は微笑みの内に息を引き取った。

しかし、母がその名を呼びながら泣き伏しても、犀蔵の胸に感情的なものは何も無い。

その時、再び目が合った男性が、やはり優しさ溢れる眼差しと暖かい笑みを向けたまま、犀蔵の頭をくしゃっと撫でた。

「犀蔵…、繋げよ」

力強いその言葉に、犀蔵は訳も分からないまま、それでも深く頷いていた。

「頭…、ありがとうございました。
最期に犀蔵に会う許可を頂いて…、志乃は笑って逝きました」

村へ戻ってすぐ、和栄は孫七を訪ね深く頭を下げた。

当初は、素性の分からない男の子など…、と、疎ましく思っていた
和栄だった。が、志乃から抱き受け取った産まれたばかりの赤子は、
小さく軟らかく、それでも力一杯に存在を訴え泣き叫び、両手に命
の重みと温もりを伝えた。

思わず溢れ出した涙に、和栄は自分の了見の狭さを恥じたのだった。

「姉さん…、犀蔵をよろしくお願いします」

志乃は愛して止まない亡き父の名前を赤子につけ、小太郎と二人並
んで深々と頭を下げた。

その姿勢のまま涙に震える志乃の肩をそつと抱いた小太郎も又、涙を堪えられずにいた。

「犀蔵…、この子が…、犀蔵………………。志乃…、任せなさい…、姉さん一生懸命犀蔵を育てるから…。姉さんに任せなさい」

自らの子の無かった和栄夫婦は、犀蔵を我が一粒種とし、愛情の全てを注ぎ込んだ。

そして、その成長に自らが一喜一憂する度に、その場に居られない志乃と隆三郎こと小太郎を不憫に思い哀れんでいたのだった。

志乃と犀蔵の再会は、今生の別れとなったが、和栄はその安らかな死に顔に、女として母としての充足感を見出だせた気がしていた。

和栄から報せを聞き、空が白み始めてすぐに炭焼き小屋を訪れた孫七は、しばらく呆然と立ち尽くした後、その座敷に力無く背中を丸めて座り込んだ。

目の前の一つの布団には、寄り添い眠る様な二人の亡骸なきがらがあった。

犀蔵と和栄が去った後、小太郎は布団に潜り込み、まだ微かに温かい志乃を抱きしめた。

「志乃…、見たか…？ 犀蔵は立派になるぞ…。しっかりした顔付きをしてたな。

目元がお前にそっくりだ。何の心配も無い…」

小太郎は、志乃の懐刀を抜いて自らの首筋に宛てがった。

産まれた時に一度抱いたきりの犀蔵は、健康で利発そうな八歳の少年になっていた。

少し垂れた感じの優しい目元は志乃によく似ている。

『繋げ』

大切な唯一の事は伝えられた。

今は分からなくても、いつか分かる時が来るだろう……。いや、頭で分からなくてもいい、きっとその身体に流れる熱い血が導く筈だ……。

「颯太…、もういいよな…」

まさに九年ぶりにその愛しい名を口にした小太郎は、一筋の熱い涙を流した後渾身の力を込めて刃を引き絞った。

ゆっくり瞼を閉じたその顔には、微かな安堵の笑みが浮かぶ。

「逢えて…、よかった」

犀蔵に名前さえも知らされる事の無かった、実の父・小太郎の一人
穏やかな最期だった。

天狗の面を着けた犀蔵が、村外れの大木の枝にひよいと飛び上がり、
追って来た仲間達の頭を軽々と飛び越え、高らかな笑い声を残して
駆けて行った。

その人並み外れた身体能力には、歩き始めた頃から目を見張るもの
が有った。

瞬時に危険を察知し、判断し行動に移す…、その感覚の鋭さは、も
はや動物的なものさえ感じさせる。

（さすが沢渡の小天狗小太郎の子…）

孫七は穏やかに懐かしむ様な笑みを浮かべて見守った。

密かに犀蔵は確信していた。

あの日、あの女性が実の母だったのなら、あの男性は……、実の父。

『繋げよ』

今もまだその言葉の意味は分からない。

しかし、暖かい笑みと頭を撫でた大きな手の温もり……、犀蔵は確かにそこから何かを受け継いだ気がした。

血が騒ぐ……、じつとなどしていられない。

身体の奥から何かに突き動かされる。

強くなりたい、強く生きたい……。

仲間を村を……、護りたい。

見えない大きなものに見守られている様な安心と自信……、そして沸々と沸き上がる希望に充ち溢れる犀蔵は、やがて草月が誇る名づての忍びへと成長を果たして行った。

繋ぎし者（後書き）

お世話になっております、遊戯（Yugge）でございます。

この物語は、次回『エピソード』を以って完結とさせていただきます。

^{つたな}拙い筆力にご辛抱頂き、ここまで読み進めて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

又どちらかでお目に留めて頂く機会がございましたら、その折にも何卒よろしくお願い致します。

ありがとうございました。

EPILOGUE

「やばっ…、マジやばい…」

黒く澄みきつた冬空に、ネオンが冴えて光る夜の繁華街。

一人の青年が雑踏を縫う様に駆け抜けた。
何事かと振り向いた人々がホツとしたのも束の間、今度は五、六人の男達が声高にその後を追って行く。

「オラア、待て！ くそガキ！」

「待たんかい！ コラア！」

(くっそ！ あのアマ、ヤクザの女だったなんて…)

白い息を荒く吐き散らす青年はふと辺りを見回して、換気口から油臭い風を吹き出す寂れた路地へと飛び込んだ。

クリスマスを彩るお洒落な店が並ぶ表通りとは対照的に、古い焼鳥屋や居酒屋が軒を連ね、割れた看板と玉暖簾の中からは下品なバカ笑いが聞こえ、通りの喧騒が遠くなる。

(げっ！ 袋小路！？)

角を曲がった所の塀の前で青年の足が^{すく}竦み上がる。

男達の罵声が背後に迫り、背筋を冷たいものが走った。その時。

ダウンジャケットの袖をグイッと引つ張られ、青年はひと一人がようやく通れる程の隙間に押し込まれた。

「な、何を…」

「しいい…」

隙間に立ち塞がる様にして、若いその男は青年に背を向ける。

「あの野郎！ どこ行きやがった！」

「確かにこの路地に入ったんすよ…」

男達はすぐ傍まで来てうるついている様だ。

その中のスキンヘッドの中年男が、道端でクチャクチャガムを噛む若い男に鋭い目を向けた。

男は臉にかかる前髪をかき上げて優美な笑みを返す。

「おじさん…、俺買ってよ…。二万でいいや…」

スキンヘッドは、男の足元にペツと唾を吐き捨てて顔を背け、連れの男達に怒鳴った。

「行くぞ！ けったくそ悪りい！」

「今度見つけたら、ただじゃおきませんよ…」

男達の声が遠ざかり、近所の店で始まったカラオケのイントロと白

々しい掛け声が聞こえる。

「行つたぜ……」

男が身体をずらし、青年はまず顔だけを覗かせ、様子を窺いながら隙間から出て来た。

「あんだ…、身体売つてんの？」

青年の好奇に充ちた目付きに、端正な顔立ちの男はあからさまに不快感を表しわざとらしく声をあげた。

「おじさん、ここにいろよ」

「うおーい、やめろやめろ…、悪かったよ」

「命の恩人だぞ…、何か言う事あんだろ？」

男は二重の綺麗な目を細め、尻目に青年を睨み付けた。
見られた青年は、その妖しげな眼差しに一瞬ドキツとしながらも慌てて答える。

「あ、ああ…、助かったよ…。ありがとう。」

「ふん…、そんな事たぁいいから飯、奢れ……」

男はムートンのハーフコートの裾を翻し、青年の腕を引っ張って歩き出した。

「飯！？ ……まっいいや、あんま高けえもんは勘弁な……」

あつ…、俺、颯太…。
あんたは？」

「俺は…、小太郎」

二人は肩を並べて、表通りの雑踏の波に乗った。

「ふうん小太郎…か、時代劇みてえな名前だな。“せっしや”とか言うの？」

「うるせーよ。お前こそ、ヤクザの女に手え出したってとこか…」

「何でわかった!？」

小太郎は、颯太の不思議がる顔を見て堪え切れずに吹き出して笑った。

「テレビドラマに有りがちなシチュエーションじゃねえかよ」

小太郎の笑顔につられて颯太も笑う。

「言われてみりゃあな…。ハハハ。でもこっちは必死だったんだぜ」

小太郎は颯太の屈託の無い笑顔に、ふと懐かしいものを感じ胸が暖かくなった気がした。

「前に会った事あるか？」

「いや…、あんたみてえなイケメンに会ってりゃ忘れねえさ…、で、

幾らならやらしてくれる？」

颯太はニヤついて言ってから肩を竦めてすかさず足を早めた。

「おらあ！ ケンカ売ってんのかコラア！」

一瞬呆気にとられ苦笑いの小太郎が足蹴にする振りをして後を追った。

人の流れは、やがて大きな河となって二人を飲み込んで行く。

それでも二人が互いを見失う事は決して無い。

離れても必ず又逢えるのだから…。

再びその手をとる日まで、貴方を求め続けよう。

歴史の闇に埋もれても…、果てなく繋がる運命さだめの輪に幾度巻き込まれ様とも…、焦がれる想い燃え尽きるとも…。

今、精一杯の…、命を舞え。

UNKNOWN

輪舞、巡り愛

Fin.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406i/>

UNKNOWN ~ 輪舞・巡り愛 ~

2010年10月9日05時32分発行